

琉球大学学術リポジトリ

神宮文庫本『狭衣』翻刻(巻一)

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-07-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 萩野, 敦子, Hagino, Atsuko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/908

神宮文庫本『狭衣』翻刻（巻一）

萩野敦子

はじめに

『狭衣物語』の一伝本たる神宮文庫本は、中世末期から近世初期にかけての書写とみられる四巻四冊の完本である。その本文は諸伝本の要素を取り入れた混雑的性格が著しいが、それゆえ『狭衣物語』の流布・享受の一端を知るうえでの貴重な資料といえる。本稿をその翻刻紹介の第一回とし、引き続き本紀要に連載する（全五回）予定である。なお、貴重な写本の翻刻公開をお許しくださった神宮文庫関係者の方々に、記して感謝申し上げます。

凡 例

一、本稿は、神宮文庫蔵『狭衣』全四冊（いわゆる『狭衣物語』全四巻）のうち、巻一（原本では一冊目。表紙には『狭衣 上』とある）を翻刻したものである。

二、紙幅の関係で原本どおりの行取りにはせず、追い込みで翻字した。

和歌に関しては、原本の体裁と同様二字下げとし、後続の散文は行替えせずに続けた。ただし和歌が二首続く場合には、原本と同様に二首とも二字下げで前後の行から独立させて示した。

三、原本で本文の開始となる丁を第1丁とし、各丁表・裏（略称オ・ウ）の区切りごとに、「1オ」以下の印をつけた。ここまですが第1丁表に相当するという意味である。

四、翻刻にあたっては、現行の正字体を用いた。また、原本に存在する各種の書き込みを再現するにあたり、便宜上次のような記号を用い

た。

① 見せ消ち部分には傍線を引き、訂正文本がある場合には（ ）を付して記す。

② 補入文字については□で囲む。

③ 異文注記については、注記の対象となる本文のあとに《 》を付して記す。

五、明らかな誤字誤写とみられる場合でも特に「ママ」等の注記をほどこさず、原本に忠実に翻刻することを旨とした。

神宮文庫本『狭衣』（巻一）

狭衣 上（表紙）

白紙（見返し）

少ねんの春はおしめともとまらぬものなりければやよひの廿日あまりにもなりぬ御まへの木たちなにとなくあをみわたりてこくらきなかに申しまのふちはまつにとのみもおもはずさきかゝりて山ほとゝきすましかほなるにいけのみきはのやへ山吹はあてのわたりにことならすみわたさるゝをひかるけんしの身もなけつへきとの給けんもかくやなとひとりみたまふもあかねはさふらいわらはのをかしけなるして一えたおらせ給てけんしの宮の御かたにもてまいりたまへり御まへには中なこん中将やうの人々さふらひてみやは御てならひゑなとかきすさひてそふさせ（1オ）給へるにこの花のゆふはへこそつねよりもをかしうみえ侍れ春宮のさかか

りにはかならずみせよとの給はするものをいかて御らんせさせてしかな
とてうちをき給ふを宮すしおきあかりてみをこせたまへる御つらつき
まみのうつくしきは花のほひふちのしなひにもこよなくまさりてみえ
給をれいのむねうちきはきてつくくとまほらせ給に花こそ春のととり
わきて山吹をてまさくりにしたまへる御てつきいともてはやされてい
ひしらすうつくしけなるを人めもしらす我身にひきそへまほしくおほゆ
るさまそいみしきやくちなしにしもさきそめけんちぎ(1ウ)「りそく
ちおしき心のうちいかにくるしかるらんとたまへは中なこんの君さる
はこののはおほく侍るものをといふ

いかにせむいはぬ色なる花なれば心のうちをしる人そなきとおもひ
つゝけられ給へとけに人もしらすりけりたつをたまきのとうちなけかれ
てもやのはしらにより給へる御かたちそ猶たくひなく見え給によしな
きことによりさはかりの御身をむるのやしまのとのみおもひこかれ給そ
いと心くるしきやさるはこのけふりのたゝすまひしらせたまつらんこ
ともをよひなくいかならんたよりにてなとおほしわつらふには(2オ)「
あらずたゝふたはより露はかりのへたてなくおひたち給ておやたちをは
しめよその人々みかか春宮なともひとついてもせとおほしめしをきてたる
をわれはわれとかゝる心のつきそめておもひわひつめかしてもかひな
かるへきものからあはれに思ひかはし給へるにおもはずなる心^のあり
けるよとおほしつとまれこそせめ大殿宮なともたくひなき御心さしとい
ひなからこの御ことはさらはさてもあれかしとはよにまかせ給はしよそ
の人のきゝおもはむもゆかしけなくけしからすもあるへきかなゝととき
まかうさまに世のもときになりぬへきことなればあるましきことゝふか
く(2ウ)「おほしとるにもあやにくに心のうちはくたけまさりつゝけ
にいかなるさまにかつるには身をもなしはてんと心ほそくおほさるへし
いまはしめたることにはあらねともなを世中にさらても有ぬへかりける

ことはあまりよろづすくれ給へらん女の御あたりにはまことの御せうと
ならざらんおとこはいみじうともむつましうはおほしたて給ふましきわ
さなりけれとはやうはなかくすみとしうさい中將なとやうのためしともゝ
なくやはましてこれはことほりそかしいはけなくより人にもにすめてた
き御ありさまをやうくものゝ心しり給まゝにかゝらん人をこそわかも
のにはせめこれに(3オ)「をとりたらん人をはみしとのみおほしし
みにけれはとかく人を見あつめ給まゝにいとかくしもつくりをきゝこえけ
んむすふの神さへうらめしくそおほさるゝこのころほりかわのおとゝと
きこえさせてくわんはくしたまふは一条院たうたいなどの御ひとつきさ
いはらの二のみこそかしはゝきさきも打つゝきみかとの御すちにていつ
かたにつけてもをしなへておなしみこときこえさするにもいとかたしけ
なき御身のほとなれとなにのつみにかたゝ人になり給にけれと故院の御
ゆいこんのまゝにうちかはりみかたとゝこの御心によをまかせきこえ給
て御なかなともあらまほし(3ウ)「うめてたき御有さまともなり二て
うほりかわのわたりを四まちつきこめて三かたにへたてつゝつくりみかゝ
せ給へるたまのうてなに北のかた三人をそすませたまつり給ひけるほ
りかは二ちやうにはやかて御ゆかりはなれぬこせんたいの御いもうと前
齋宮おはしますとうるんにはたゝいまのおほき大とるときこえさする御
むすめ一条院のきさいの宮の御をとうと春宮の御をよ世のおほえうち
くの御ありさまはなやかにたのもしけなりはうもんにはしきふきやう
の宮ときこえさせし御むすめそなかには心ほそけなる御ありさまなるへ
けれと女君のよにしらすめてた(4オ)「きところうみたてまつり給
へりけるをうちにまいらせたまつり給てこのころ中宮ときこえさす今
上の一のみこざへいておはしましたる御いきほひなかくすくれてめて
たく行すゑまてたのもしき御有さまをついちをへたてつゝかよひて殿は
みだてまつり給かゝる御なかにも齋宮はおやさまにあつかり給てしかは

やんことなくかたしけなきかたも御かたちありさまをはしめて心さまもなへてならずおもひきこえさせ給へる御かたにしもかくすくれてこの世のものとも見え給はぬおとこ君さへたゝ一人ものし給をいかてか世のつねにおもひ（4ウ）「きこえさせ給はんあまたものしたまはんにてたにいとかゝらんはおやの御心ちにもいかてかすくれておほしかしつかさらんと見えたりこのころ御とし廿にいま二はかりやたり給はさらん二の中將とそきこゆめるなへての人たにかはりにては中なこんにもなり給へきそかしされともこの御有さまのよろつこの世の物ともみえたまはぬゆゝしさにおほしおちて御心にもまかせきこえ給はぬなるへしこれをたにはゝ宮はちこのやうなるものとあへかにいまゝしきまておほしたためれとをしなへての殿上人のやうま（に）てましらひ給はんか心くるしさにうち（5オ）「のせちになさせ給へるなるへしたい十六かさかむに仏とりこの世のひかりのためとけにあやうきものにおもひきこえさせ給へるもことはりなりやたゝうちみるよその人たに我身のうへをもわすれ思ふことなき心ちすれはまいて大殿などはあめかせのあらぎにも月日のひかりのさやかなるにあたり給ふもいまゝしくゆゝしき物におもひきこえたまひつゝおほふはかりの袖のいとまなくあまりこちたき御もてなしともをうきはたのまれぬへくるしくおほざるゝおりもあるへしされとさのみもいかてかはしたかひきこえ給はんよるなとをのつからまきれ給（5ウ）「夜なくはふた所なからうちもまとろますうしろめたきことをなけきあかせ給へとむかひきこえさせたまひぬれは思ふまゝにもせいしの給はてたゝうちゑみつゝみたてまつり給へるけしきともいひしらすあはれけなり見くるしくあるましきことをし給ともこの御こゝろにすこしにてもくるしうおほしぬへからんことをはたかへきこえさせ給へうもあらずゆめはかりもあはれをかけ給はん人をはいひしらぬしつめなりともたまのうてなにはくくまんことをおほしをきつれといかな

ることにか御身のほとよりのみしくしつまりてこの世はかりそめにあち（6オ）「きなき物とおほしてありてふ人はしらまほしく（け）にもおほしたらすおほろけならすさらんことは御めもみゝもとゝめ給へうもあらねはすこしものすさまじう心もやましき御けしきなるをくちおしく心もとなき物におもひきこゆる人々もあるへしざるはまれくゝひとくたりもかきなかし給みつくきのあとも猶めつらしくをきかたき物に思ひかことはかりのゆくてのなさけをも身にしみてをかしういみしとこゝろをつくしまいてちかきほと御けはひなどはちよを一夜になさまほしくとりの音つゝきあかつきのわかれにきえかへりいりぬるい（6ウ）「そのなかゝなるなけきをひるよなく心をつくす人々たかきもいやしきものをのつからいかてかなからんそれにつけてはいとゝうらみ所なくすさまじさのみまさり給へかめれといとなへてならぬあたりにはなたらかになきけを見せ給ひておりにあひたる花もみちしも雪雨かせのあらきまきれもしはあはれまさりぬへきたくれあかつきのしきのはかせにつけておもひかけぬほとにさすかにいつくにもをとつれ給ことはたえすかけろふにをとらぬおりくゝにつけては中ゝ心をまとはしていなふちのたきまさりていそふりに心をつくし給なめりかしきこそまめ（7オ）「たち給へと猶このあくせにむまれ給へはにやたゝひきすき給みちのたよりにもすこしゆへつきたる山かつかきほのなてしこはをのつからめとまらぬにしもあらぬほとにのをなつかしみたひねし給あたりもあるにやいかなるおりにかほんわう經に一けんを女人との給へることをおほしいつれはくるまのすたれうちをろしつれとそはのひろくあきたるをはえたてたまはぬなめりかしさてたにいかてかおはせさらんおとこといふものはあやしきたにもみのほともしらすいかなるものゆかしかりせぬものはなき世のさかなりければまひてひかりかゝやき給御かたちをはき（7ウ）「るものにて御心はへまことにしき御さえなともろこしにやたくひもあらんこ

の世にはいまもむかしもためしなくそのし給ひけるてなとかき給さま
 もいにしへのなたかかりける人々のあととせふれともかはらぬに見
 あはせ給へはなをときにしたかふわさにやいまめかしくたをやかになつ
 かしくうつくしきさまはこよなくかきまし給へりとそさためられ給める
 又ことふえの音につけても雲井の(を)ひゝかしこの世のほかまですみ
 のほりてあめつちをうこかし給つへきをいとあまりゆゝしくおほしてお
 やたちせいしきこえ給てなことをもあ(8才)「なかにこのみせさ
 せてまつり給はねはわれも心とゝめて人にみゝならし給はずなとあれ
 はよろつにむしむにもすさまじき人さまにやとをしはかられたまへと
 すこしさいはらうたひ経なとよみ給へるはきかまほしくめてたし何事も
 たてゝならひ給こともなしこの御師となるへき人もなければとたゝいかに
 したまへるにかめつらしくためしなき御さまけしきなとは打みてまつ
 るより御かたち身のさえなとも御としのほにもすきてまひてさかりに
 ねひとゝのひ給はんゆくすゑゆかしくあまりなるわさかなとおとろきあ
 さみこ(8ウ)「のよのひかりのためにあみた仏のかりそめにいて給へ
 るにやといひしらぬしつのおなともみたてまつりてはわか身のうれへも
 わすれてあさましけなるかほのゆくゑもしらすゑみひろこりあるはをか
 みたてまつりてなみたをなかつてよの人のことくさにきこえさすめれと
 大とのなとはあまりゆゝしくあめわかみこのあまくたり給へるにやとけ
 ふやあまのはころもむかへにえたまはんとあやうくしつ心なき御心のう
 ちともなりけんしの宮ときこゆるはこせんたいの御すゑの世に中なこん
 の宮す所ときこえ給し御はらにたくひなくうつくしき(9才)「女宮の
 むまれ給へりしをいまさらのほたしと心くるしくおほしはくゝみしほと
 に宮の三つに成給ひしに院もはゝ宮す所もうちつゝきかくれさせ給ひし
 かはいとこゝろくるしうて斎宮やかてむかへとりきこえ給て中將のおな
 しことにおもひかしつききこえさせ給とのもまことの御むすめよりもい

ますこしやんことなきかたそへておもひかしつききこえ給へり十に四五
 あまらせ給へる御かたち有さまほのみたてまつらん人はいかなるものゝ
 ふなりともやはらく心かならずつきぬへきに中將の御心のうちはこのは
 りそかししはしはさりともなすらへ(9ウ)「なる人もありなんとたの
 まれ給しをかのよしたかかくれみのをこそえ給はねとをのつからたかき
 もくたれるもたつねよりつゝいたゝのはしはくつれといとけちかきほと
 にこそあらねたちきゝかひまみなどはかしこく御心にいりたるまゝにお
 ほつかなきはすくなけれとこの御かたちありさまになすらふはかりのあ
 りかたきわさにこそとおほざるゝまゝにいとゝ人しれぬ心のうちにおも
 ひこかれ給さまいとをしくをとなしのたきとやつるになりはてんと見ゆ
 るをさすかに忍びまきはし給にはれくしからすむすほゝれ給へる御
 けしきををとなひ(10才)「給ふまゝに人の御くせにこそと忍ぶもちす
 りをたれもえしり給はぬなるへしおほき大とのゝ御かたにそかやうの人
 いておはせていとつれくにおほざるゝまゝにさるへからん人のむすめ
 かなあつかりてあつかひくさにせむなとあけくれはうらやみ給ひけり源
 氏の宮の御かたちなたかくて春宮いとゆかしうおもひきこえ給へるをけ
 にこそはつゐることならめとおほしたり内のうへもむかしの御ゆいこん
 をおほしわすれすあはれにきこえさせ給ひなからもおほつかなくてすこ
 させ給ふにさやうにて内すみもし給へかしとをゝにもきこえさせおと
 ろかさせ給(10ウ)「へりされといとゝしき御有さまをいまずこしねひ
 とゝのほり給ひてこそなとおほろけならすおほしをきつる御いそぎなる
 へしかくいふほとにう月もすきてさ月の四日にもなりにけり夕つかた中
 將の君うちよりまかて給みちすから見給へはあやめひきさけぬしつのを
 なくゆきちかひもてあつかふさまにもけにいかはかりふかゝりけるとを
 ちのさとの恋路なるらんとみゆるあしもとゝものいみしけなるをいかに
 くるしかるらんとめとまり給て

うきしつみねのみなかるゝあやめくさかゝる恋路と人はしらぬにと
 そいはれ給たまの（11才）うてなの軒はにかけて見給はをかしうのみ
 こそおほざるゝを御くるまのさきなるをおとろくしき御すいしんのこ
 ゑくにおひとゝめられて身のならんやうもしらすかゝまりぬるを御ら
 んしてさはかりくるしけなるものをかかないひそとせひせさせ給へはな
 らひにて待ればさはかりの物はなにしかくるしとおもひらんと申を恋
 のもちふはわか御身にならひたまへればこゝろうくもいふかなとき給
 おほきなるもちいさきもつまことにふきさはくを御くるまよりすこしの
 そきつゝすき給にいひしらすあやしきいほりともたゝひとすちつゝを
 きわたすをなに（11ウ）の人まねすらんとあはれに見給ふあふきをふ
 えにふきつゝほの見え給へるゆふはへの御かたちまことにひかるやうな
 るをはしとみにあつまりたちてみてまつるあくる人々有けり御くるま
 などもいまはをとなくなり給めれと御とのさうしき御すいしんなど
 はいとわかかをしけにをもゝちけしきすかたなともなへての人と見え
 すめつらしくうつくしけなるをあはれあれか身にてたにあらはやなにこ
 とをおもふらんとわかき人々はめて給ひてすき給もなをあかねは軒のあ
 やめ一すちをひきおとしていそきかきてはしたものをかし（12才）
 けなるしてをひてたてまつるをくれてはしる御すい身にとらせてかへる
 をいつくよりとか申さんやかて御くるまにまいり給へとてとらへつ御ら
 んすれば

しらぬまのあやめはそれと見えすともよもきかかとはすきすもあら
 なんとそあるいかなるすき物ならんとほゝゑまれ給てつかひにとはせた
 まへといはんや心とき御すい身そのわたりにてふてもとめてまいらせ
 たるしてふところかみにかたかなにて

見もわかつてすきにけるかなをしなへて軒のあやめのひましなければ
 いまわざとまいらせん（12ウ）といはせ給てわらはのいらん所たしか

に見せよとの給へははしとみたかくあけわたして人々のすきかけあまた
 見え侍つと申せはなに人なるらん見しりつるやとおほせとかやうに（の）
 うちつけけそうなどはわざと御心にもいらてたゝあるましきことをそい
 かなるも御心とゝめ給へかめる又の日はさるへき所々に御ふみかき給色々
 のかみの色はたへなとえならぬあまたとりちらしてすみこまやかにをし
 すりてかき給ふ御てはけになてかはずこしも物みしらん人のいたつら
 に見すくさんで見ゆるに御うたともそさしもことになへての人のくちつ
 きにてた（13才）にをかしとも見えぬはまねひたかへたるなめりさ大
 將の御むすめせんえう殿ときこえて春宮いみしうときめかし給をいかな
 りけるかせのたよりにかほのかに見きこえさせ給てけりされといかてか
 おもふさまにもあらん御せうそたにおほるけならてはかよふことかた
 くそありけるあまりにまちとをなりけるも恋しくおもひいてられ給て

恋わたる袂はいろもかはらぬにけふはあやめのねさへなかれて一条
 院の姫宮の御けはひもほのかなりしかはにやなへてならぬ心せしをい
 かて御かたちなどよくみ^たてまつらんと心に（13ウ）かゝり給へは少
 將の命婦のもとへれいのこまやかにて中には

思ひつゝいはかきぬまのあやめ草みこもりなからくちやはてなんな
 とやうにてあまたあれとおなしすちなればとゝめつかやうにおりにつけ
 たることのはなどはちらし給へと心のうちにはいつまでかとのみこの世
 はかりそめにものすさまじくそおほざるへき丁子にくろむまでそゝきた
 る御ひとへにくれなるのはかまき給ていけのしやうふの心ちよけにしけ
 りたるをなかもやり給て一しよにさんす《すんにみてるイ》とすむし給
 御こゑはなをたくひなしありつる御かへりいづれ（14才）もをかしけ
 なるにもせんえうてんのは御ても心ことにをかしけにて

うきにのみしつむみ草となりはてゝけふはあやめのねたになかれす
 とあるけしきなどもむかひきこえたる心ちしてらうたけにあはれあさか

らねはずこしなみたくまれたまひぬその夜はもしさりぬへきひまもやと
 うちわたりにいてたち給にいとゞめしさへあれはまいり給にまつとのゝ
 御かたへまいり給へりけふはいまたみてまつりたまはざりつるにめつ
 らしきにほひそひ給へる心ちしてうちあみつゞつくとまもられ給内
 よりめしあれはまいり(14ウ)「待みやの御かたへ御せうそこやと申給
 へはけされるならぬさまにきゞまいらせつればまいらんとしつるをかせ
 にや心ちもなやましくてくらし侍りつるをいまつとめての程にためらひ
 てまいらんあつき程はしいいてゞやすませ給へとかしとおもふもれい
 の御いとまや有かたからんときこえさせ給へは御いらへしてたち給ぬま
 たしきにあつきところせきとしかななにしにつねにめすらんとつふやき
 給をはゞ宮きゞ給てくるしうおほえ給はゞなにかはまいり給うちわなと
 せさせてふし給へかして心くるしけに見やりきこえさせ給ふさうかん
 (15才)「のくれなるの御ひとへにおなし御なをしのとこきになまめかし
 しこのふせんれうの御さしぬきのすそまでたをくゝとあてになまめかし
 うきなし給へるものゝ色あひなとなへての人のきるおなし物とも見えぬ
 をなとかくあまりゆゞしくおいなり給らんとなみたをひとめうけてせち
 に見をくらすせたまへるを御まへなる人々ことほりなりかしたあはれに見
 たてまつる人々ことうちにはわさとせちあなともなき世のつれくにお
 ほしめさるゝにあま雲さへたちわたりて物むつかしきなくさめに春宮わ
 たらせ給て御物かたりなとあるなりけり御前のひ(15ウ)「ろひさしに
 大とのゝこん中なこん左兵衛督右大将の御子のさいしやうなとやうのわ
 かゞむたちめあまたさふらひ給に源中将のまいり給はぬをいとゞしき五
 月雨の空ひかりなき心せさせ給てめすなりけりこよひのえんにはさふ
 らふかきりの人々はさえのかきりてをおしますひとりつゞ心みんとした
 まはするを春宮もけうあることゞのたまはせてさまくの御ことゞもた
 てまつりわたす中なこんひは兵衛督しやうのことさいしやうの中將わこ

ん中務宮のせうしやうしやうのふゑ源中将よこふえたまはすたゞいまの
 いみしき物の上手ともなるへしをのくこの音ともてをつくし(16才)「
 てきかせよとの給はするをたれもひとつにかきませてこそあやしきもま
 きらはしてつかうまつらめいとほりなきわかかなとつかうまつりにくゞ
 わひ給ふ中に中將はよろつのことよりもまたたはふれにも更にまねひ侍
 らぬものをとそうし給をたゞそのしらむことをこよひはしむへきな
 りとの給はすれとをしふる人たに侍らはたとるくもつかうまつるへき
 にをのをてをつくし給はんかたたとくしくはしめ侍らんはけにか
 きりなきよのためしにや侍らんとてこのほかにて手もふれたまはねは
 いとかはかりの心はへとは思はずこそ有つれ(16ウ)「このほかにこ
 そとしころおとくの思ひたりつるにもをとらすこそ思ふにかはかりの
 ことをたにいふまゞならざりければましてよろつをしはからぬよし
 くいはしとまめたち給にいとわひしくてかしまりてとりよせ給ても
 物にませてはをのつかからかたのやうにもまねひ候なんひとりはいとわり
 なきわさなれとなやめるけしきのをかしさいうらみはてさせ給へくもあ
 らす御らんしける人々もなかゞことなる御あそひと心つくろひしてと
 みにてもふれ給はず中將の四五のさえはかりにたに侍らぬものゝて(17
 才)「をまきれなくひきあらはし候なんはつかしきによろつこの人のかは
 りにことをかへつゞつかうまつらせはやとこんちうなこんそうし給へは
 ひとつをたにさはかりこゝろはからんにまして人のかはりすへうもあ
 らざめりとてせめさせ給へはをのくこゝろつよひいたうしてひきいて
 給へるものゝ音ともいとおもしろし中將のふえに成てさていかにつかふ
 まつるまじきかなとたひくゞまめやかなる御けしきにてせめさせ給へは
 いとわひしくてかくとしらまはまいらざらましをとくやしけれとの
 かるへうもあら(17ウ)「すふえをもうゑくしけにとりなしてことに
 人のきゞしらぬてうしひとつはかりふきならし給へるにうへはをとにきゞ

つれといとかくまでとはおほしめさゝりつるをいままでみゝならさゝりつるうらめしさをさへひきそへておほせられてめておとろかせ給さまいとこちたしきくかきりの人々さらにこの世のものゝ音とはきこえぬにのみたもとゝめかたけれと中くゝなる程にやめ給ぬるをいとあるましきことゝせめの給はずれとたゝかはかりなをと^七のたはふれにをしへ侍りしこれよりほかにすへておほえ侍ら（18才）「すとそうし給へはいとゝうたてくそらことをさへつきゝういふかなおとゝのふえの音になるへくもあらずすへてかくくるとおもはれんことさらにいはいしこよひは猶うらみとくはかりとあなかななる御けしきのかたしけなきもいとわひしくて皇太后宮のひめ宮などのうへの御つほねにおはしますころにて心にくき御あたりはなに事ものこりなくはきかれたてまつらしと思ふかたさへいとゝしきなるへし月はとくいりて御せんのとうろの火ともひるのやうなるにほかけにかたちはいとひかるやうにてはしらによりゐてま（18ウ）「めやかにわふくゝふきいて給へるふえの音雲井をひゝかし給へるにみかたをはしめたてまつりてこゝのへのうちのしつのをまてききおとろきてなみたをおとさぬはなし五月雨の空物むつかしけなるに物やめみいりきこゆらんとまてゆゝしくあはれにたれも御らんするにおとゝましてみたまはゝいかはかりいまゝしくおほさんわか御心ちにもおとろかせ給御そもしほるはかりにならせ給ぬよひすくるまゝに雲のはたてひゝきのほる心ちするにいなつまたひゝして雲のたゝすまるれいならぬを神のなるへきにやとみゆるに（19才）「ほとなく空いたくはれてほしの光とも月にことならずかゝやきわたりつゝこの御ふえのおなしこゑにさまゝのものをゝ音とも空にきこえてかくの音いとおもしろく御かと春宮をはしめ奉りていかなることとあさみさはかせ給に中将君ゆゝしくあはれに物心ほそくおほされておさゝくをしむてもなくふきすまし給へるをあまりなるまであさましきにたれもゝあきれたるやうなりかく

のこゑくちかくなりてむらさきの雲にのりてあそふもいとちかく見ゆるをみさはきたるに中将の君物心ほそくなりていたうおしみ給ふ音を（19ウ）「やゝのこすくまなくふきすまして

いなつまの光にゆかんあまのはらはるかにわたせ雲のかけはしと音のかきりふきたまへるはげに雲のなかにひゝきいるに月の宮この人もいかてかおとろかさらんとおほゆるにかくのこゑくゝいとちかくなりてむらさきの雲たなひきたるをみるにひんつらゆひていひしらすをかしけるわらはのしやうそくうるはしくしたるふとおりくるまゝにいとゆふかなにそとおほゆるいとうすきころも中将にうちきせ給て袖をひき給をわれもいみしう物こゝろほそくて立とまるへき心ちもせずかくめて（20才）「たき御有さまのひきはなれかたくてふえをふくゝさそはれぬへきけしきなるに御かと御こゝろさはかせ給て世の人のことくさにこの世の物にはあらず天人のあまくたれるならんとのみいひおもひたるはまことにごそ有けれおとゝのかやうのことをたまさかにせさせす月日のひかりにあてしとあやうくいまゝゝしきことにおもひたる物をめにみすゝくものはたてにまよはしてはわか御身もこの世にすこさせ給ふへくもおほえさせ給はねはなみたもゑとゝめさせ給はすいとみしき御けしきてひきとゝめさせ給にましておとゝはゝ宮などの（20ウ）「きゝ給はんことおほすにいとほしうおほざるゝこの世なれとふりすてかたきにやかゝる御むかへのかたしけなきにひとへに思ひたてと御かとの袖をひかへておしみかなしみ給おやちのかつみるたにあかすうしろめたくおほしたるを行ゑなくきゝ給てむなしき空をかたみとなかめ給はんさまのかなしさよ（に）はこのたひの御ともにまいるましきよしをいひしらすかなしくおもしろくつくりてふえをもちなからすこしなみたくみ給へる御かほは天人にならひ給へるにもにほひあひ行はこよなくまさりてめてたき御こゑしてすんし給へるにあめ（21才）「わかみなみたをなかし給てか

くなに事もこの世にすぐれ有かたきによりさそひつれと十せんの君のおしみなし給ことほりにめてたうかなしきふみの心はへによりとゝめつるくちをしきをつくりかはして雲のこしよせてのり給ぬるなこりのにほひはかりとまりて空のけしきもかはりぬるをあさましなともおろかなることをこそいへめつらかなりと見るかきりは夢の心ちし給ひけり中將の君はあめわかみこの御ありさまをもかけにこひしくていみしう物あはれと思ひたるさまにて空をつくくとなかめいり給へるけし(21ウ)きにて

こゝのへの雲のうへまでのほりなはあまつ空をやかたみとはみんいとゝこの世の(に)心とゝめすやなりなむとあやうくうしろめたくおほしめされて何事に心をすこしなくさめんとおほしまはすに大臣になすともうれしとおもはしおとゝもさらにうけひかしかひなくおほしめすに皇太后宮の御はらの女二の宮の御かたち心はせことほりにもすきておはしますをいみしくかなしき物にしたてまつり給けり一の宮はこのころ齋院にておはしますききもこの宮をはたくひなく思ひかひつききこえさせ(22才)給てよのつねの御有さまなとおほしかくへくもなきを中將のこよひのものゝ音に天人たにきゝくしたまはてをはしてさそひ給へりにたゝにてやませ給はんことあるまじきことなるにそへてかく心くるしげに思ひあくかれぬへきけしきなるに宮このころさかりにとゝのひ給へるさま見たてまつらんにはこの世にはえあくかれしとおほしなりぬおほ殿には中將の君はこよひはいて給ましきにやとたつねさせ給ほとに藏人所のかたにこはたかに物いふをなに事ならんときかせ給にいよのかみなにかしあそんまいりて内にかうくのこと侍なると申をきかせ(22ウ)「給御心ちともいかに有けんさらは(に)うつゝの事とおほされすのほり給つらんあとたにいま一たひ見んとの給よりほかに物もおほえ給はぬ御けしきながら御さうそくなとかたのやうにしていてたまひ

ぬるをはゝ宮はたゝ御そを引かつきてなきふし給へるよはいかに成ぬるそと見ゆるまでとのゝうちさはきたり御車そひこせんともまいりあへすみたりかはしきよの御有さまなりみちすからのほりはて給なん跡をみん心ちにあすまで世にありなんやとおほしつつけらるゝになかれ出る御涙ちくまの川わたりけるにやとみえたりみちのほとれいよりも(23才)とをくおほされて人にひかれていり給にこゝのへのうちも物さはかしけもなしひたぎやの程もつねよりもあかくみえわたりてこゝかしこのはさまへいのつらなにも物いふこゑくたゝこの事なるへしときゝ給にさてまことにのほり給ひけるにやいかにいふそとおほすに心ちもまとひてたふれ給ふ(ひ)ぬへし殿まいらせ給へと人々たきはくに中將きゝ給てこのことによりてならんかしいかはかり御心まとはし給つらんとおほすもいとおしくて殿上くちにさしいて給へるをおおはしけるとうち見つけ給へるそ中くいみしきやいかなりつることそをのれをすてゝはいつくへお(23ウ)「おはせんとしつるそといひもやり給はすおほゝれ給をけにとゝまらす成なましかはかきりある御いのちもいかになり給はましとあはれにみたてまつらせ給ふためらひて御前にまいり給へれは有つることも侍らすおほやけにつかうまつりわたくしの身のためもおとこのむけにむさいに侍るはいとくちおしく侍れはそのかたはかりはかたのやうにみあかせとやいひしらせ侍りけんましてこのことたはふれにもまねふらんとこそ思ひ侍らざりつれいかにかく世のためしにもなりぬへくふきつたへ侍りける(24才)「にかめつらかにも思給へらるゝかないかにも又たくひも侍らねは心におとろくことなくていきて侍らんかきりは見侍らんをのみこの世のよろこひには侍るへきにいとつらくなるとこよひはすへてうつし心も侍らすむなしき跡を見給つたらましかはあすまでなからへておほやけにもつかうまつりわたくしのあまたのほたしともも

みたまへさらましをかはらぬさまをみせさせ給へることよろこひ申給つゝいとあやうくうしろめたしとみやり給へるけしきのことばりにいとよこよひよりは見え給へは人々もみななき給ぬ中将の君はかくいとこちたき御あそひ（24ウ）のなごりもものむつかしうあやまちさへしたる心ちし給てさふらひ給ふをうへめしよせて御さかつきたまはするとて

身のしろはわれぬきせんかへしつとおもひなわひそあまのはごろもとおほせらるる御けしきさにやと心うることもあれといてやむさしのわたりのよるのころもならましかはけにかへまさりにや覚えましと思ひくまなきこちすれといたうかしこまりたまひて

紫のみの白衣それならばをとめの袖にまさりこそせめといはれぬるもなにとかはきゝわかせ給はんいづれもむひのをりはなれぬ（25オ）「御なかともなれはいとよかりけりつねよりも物あはれなる御けしきにてしつまりてさふらひ給よそひかたちなとおほろけの女はみかとの御むすめなりともならへにくきを二宮はけしうはおほせしとおほしめすなくこゑにあくる心ちすれば人々もまかて給殿も中将の君もひとつ御くるまにて出給ぬは宮まち見たまへる御けしきおもひやるへしいかにこうし給ぬらんとて御みつからまかなひてそそのかしきこえ給へとまことにくるしうなやましとおほされてこよひはいかにもくふように侍とてやすみ侍らんとてわか御かたへわたり給（25ウ）」をいとよこよひよりはかたとき立はなれ給はんもうしろめたくわりなしとおほしたるけしきにてこよひはごなたにもし給へる（と）せちにきこえ給へはおましなとまいらせてね給ぬるやうなれとめてたかりつることおも思ひいでられてえまところまれ給はずなにとなく心ちもまことにうかひてありつるみこの御かたちをもかけに恋しく覚え給けにとの給ひつるやうにこの世には有はつましきはしめにやと我ながら心ほそしこわたのそうすめしよせてこの御かたはらにさふらはせ給とのももねたまはす今夜のことよも

かたりたまへはいともゆゝし（26オ）く覚してあすよりはしむへき御いのりのことなどの給はせてさるへきけいしなとめしあつめてやんとなくしるしあるへき人々してはしめおこなはせ給へき御いのりともこちたけに覚しをきてのたまはするさまきふし給てもなとかくしもおほすらんかゝる御こゝろともをしらすかほにあちきなくさるましきことにより身はいかにしなさんとおほゆるに人やりならず枕もうきぬへしあるましきことに返々思ひかへせとあけくれさしむかひきこえなからわきかへり心のうちのしるしもなくてすくるなけかしさはざらにおもひやむへきこゝ（26ウ）ちもせずうへのいみしうき御心さしとおほしめして給はせつる御みのしろはいとかたしけなくおもたしけれとかひくしくきまほしくもおほされすむらさきのならましかはとのみおほえて

色々にかさねてはきし人しれす思ひそめてしよはのさころもとそかへすくもいはれ給ぬぬにあけぬといひけん人もうら山しきからふしてあけぬる心ちすればひんかしのわたとのつまとをしあけ給へれば雨すこしふりたるなごりあやめのしつく所せけれとそらはあま雲はれわたりてほのくと（27オ）あけ行山きは春のあけほのならねとおかしきにはなたち花にやとかるにやほとゝきすのほのかになきわたるねにあらはれにけりとあはれにきゝ給ふ

夜もすからなけきあかしてほとゝきすなく音をたにもきく人もなしとひとりこちたゝすみ給まゝにしんしきによこんせんたんこむしんみめうとゆるゝかに打あけてよみ給へるいみじうこゝろほそくたうときをば宮おとゝなとき給て猶さまゝにいとあまりなるさまかなかくしもおひいてけんまたこそ天のむかへもあれとゆゝしうおほされて宮いさり（27ウ）出給てなとかく夜ふかくはいて給へるそ五月の空は物をそろしかなる物をとの給ふまゝにすこしはなこゑになり給ぬ殿もおきいて給て猶このころはかりは内にもなまいり給そけふより七日はしめさするいの

りのほとはおなし心に仏をもねんし給へなときこえ給にたはふれのくち
 ずさひもこちたくむつかしうのみおほざるれはいつちかまかりいてんと
 の給てたいへわたり給ひぬそのころの事にはたゝこのことをあめのした
 にいひのゝしりけりおほやけにも日記の御からひつあけさせ給てあめわ
 かみこと中将とつくりかはさせ給ひけるふみともかきを(28才)「かせ
 給ひけりとしへたるみちのはかせともたかきもいやしきもこの御文をみ
 てなみたをなかけてめてまとふをこのころのことにはしたりあつさのわ
 りなき程はいとゝ水こひとりにもをとらす心ひとつにこかれ給をする人
 なしくれつかた源しの宮の御かたにまいり給へればしろきうすものゝひ
 とへき給ていとあかきかみなる文をそ見給ふ御宮(み)はひとへよりも
 しろくすき給へるにひたひかみのゆるくゝとほれかゝり給へるすはう
 しろとひとしくひかれいきてこちたくたなはれたるすそのそきすゑい
 くらをかきりにおひゆかんととこせけなるものからたをく(28ウ)「
 とあてになまめきみえ給かくれなき御ひとへにくれなるのはかまに御く
 しひまゝより見えたるこしつきかいななどのうつくしき人にも似給は
 ぬはあまり思ひしみにけるわかめからにやとまほられ給てれいのむねつ
 ふくゝとなりきはけとよくしのひかへしてつれなくそもてかくし給める
 いとあつき程にいかなる御ふみ御らんするそときこえ給へは齋院よりゑ
 ともたまはせたとてくまなき日のけしきにはるゝとにほひみち給へ
 る御かほつきをまはゆけにおほしてすこし打あかみてこの御ふみにまき
 らはし給へるよういもてなしまみなといひつくすへうもあらず(29才)「
 めてたく見え給ふに涙さへおちぬへく覚え給まきはしにこのゑともを
 みたまへはさいこ中将の日記をめてたくかきたるなりけりと見るにあひ
 なくひとつ心なる心ちしてめとまる所々おほかるにえ忍び給はてこれは
 いかゝ御らんするとてさしよせ給まゝに

よしさらはむかしの跡をたつね見よ我のみまようこひの道かはとも

いひやらす涙のほろゝとこほるゝをたにあやしとおほすに御てをさへ
 とらへて袖のしからみせきやらぬけしきなるにみやいとあさましくおそ
 ろしうなり給てやかてとらへ給へるかひなにうつふし給ひぬる(29
 ウ)「けしきのいひしらぬものにとらへられたるやうにおほしたるにい
 とゝ心さはきしてこゝら思ひつる心のうちをかけたはしたにうちいつへう
 もなく涙にのみおほれ給へりいはけなくをはしましよりさるへきに
 やたうりのまゝの心さしにうちそへ人しれすこゝらのとしころねをたに
 たかなくよもなくおもひこかれ侍りなからあまりしらせ給はてやみな
 んかたれものちのよのためまでうしろめたう侍るへきによりもらし侍り
 ぬるこそ中ゝあさましけれ又いとかくあるさましきものおもひする人
 のたくひむかしもいまも侍らんやと思ふをあまりかくうとましけ(30才)「
 におほしめしたるこそ心うけれ

かくはかり思ひこかれて年ふやとむろの八しまのけふりにもとへか
 たはしたにもらしそめつればとしをへて思ひこかれてすこし給へる心の
 うちをきこえしらせたてまつり給におそろしき夢を見る心ちし給てわなゝ
 かれ給をむけに御らんししらすらん人のやうにかは^かかりをたにおそろ
 しとおほしたることゝなくゝうらみ給ほとに人ちかくまいるけしきな
 れはすこしのきて今よりはいかににくませ給はんすらんなにはかりなら
 ん御心かはりは中ゝ人めあやしく侍らんおほしうとむなよいはきりと
 をし侍るともをときゝもあるまし(30ウ)「きことゝおもひしりたれば
 よもみくるしき心のほとは御らんせられしあまりにおもひわひ侍りなは
 かよはぬさとにそゆきかくれ侍らんかしさやうならんおりはさぞかしと
 おほしめしいてさせ給へかしてなときこえしらせ給こともおもひやる
 へしされともいとちかくしもさふらはぬ人はいつもけちかき御ならいに
 めもたゝぬならんかしゑみ侍らんとて人々ちかくまいれば宮は御心ちれ
 いならぬとまきはしてちいさきみき丁ひきなをしてふさせ給ぬれば君

もかほのけしきやしるからむとおほせはたち給ぬるに宮はいまそよろつにおほしつゝくるかゝる心おほしける(31才)「人を露しらてたれよりもなつかしくおもひてあけくれさしむかひてすこしけるよとうとまじうおそろしきにもさるへき人々の御あたりならておひいてけるをあはれにおほししられてやかてふしくらし給へるを御めのとたちなとれいならぬ御けしきはいかなることそとあやしかるにもたれもかゝる御心をもしらぬよかやうにつねにあらははつかしうもあるへきかなとおほすにありてうき世はとけふそおほししられける中將の君もことゝてそめてのちはいとゝ忍ひかたき心のみみたまれまさりてつくゝとなかめふし給へるにとのゝ御かたよりまいり給へとあれは何となく心ち(31ウ)「のなやましきにもうけれとさきゝ給はゝ又おとろきさはき給はんもきゝにくければさうそくしとけなけにてまいりたまへりひんのわたりもいたううちとけてないかしろなる御うちとけすかたのうるはしきよりも中くゝ又かくてこそみたまつるへかりけれと見えてみまほしうなつかしきさまのし給へるをれいのうちゑまれてみたまつり給よさり中宮のいてたまはんにまいり給へうへもひとひあまりとりこめたりとおほせられきとのたまひて源しの宮の御ことを春宮のかく心もとなからせ給にいたくわひさせ奉るとうらみさせ給にすゝしくなりてさもや(32才)「と思ひたつを右おほいとのゝたゝひとりかしつかるらんむすめのとをにたにならほと心もとなからるゝからうして此八月にまいらせんとけしきとらるゝをせいすへきにもあらすきしろひ給はんもひんなければ冬つかたさらすとはしかへりてなとおもふはいかゝあるへからん春宮もいそかせ給うちもさこそあらめと御けしきあれとなにかは人のいつしかと思ひいそかれむをゝめんもいとをしかるへしなときこえあはせ給をつゐの事そかしきこそはあらめと思ひなからむねはふたかりまさりてけしきもかはるらんとおもへとつれなくもてなして人のことをのへ(32ウ)「させ給はんいとを

しうや侍らんこの御ことはいつも心のとかにてあえ侍りなんこん中なこの身にそふかけにてきはくなればわつらい(は)しきにかくいそかるるとそきゝ侍と申給へはこゝにもさ思ふなり右のおとゝのひすらんむすめこの御かたにえこそならはさらめそうかたちにはなたかにきらゝきさまにやあらんとそをしはからるゝやはゝめのとよりほかにあたりにもよせすきはもなくこそかしつくなれ身つからくゆる宮はらのむすめのやうにやあらんとてわらひ給へはかの思ひかけさりしよひのほかけはいとしもたまのきすはみえさりしかとはなたかはよくいひあて給へり(33才)「とおもふにすこしほゝゑまれぬるけしきをしるくみ給てわかゝりし時かひま見をつねにせしかはさもさまゝなる人をあまたみしかな人はいと有かたき物そかし思ふさまなる人にあふ事はかたきわさなりや故院のことゝくはいみしう覚しめしなからこのかたはあやにくにせいしさいなみてたやすくもありかせ給はさりしかとかしこうぬすまれいてゝいたらぬくまこそなかりしかかくさまゝえさらぬ人あまたものし給しにをしけたれてあはれと思ひしわたりもありしかとかひなくこそやみにしかなとむかしの事とおほしいてたりわかゝより猶やんこと(33ウ)「なきかたにさたまりぬはおもりによきことなりひとりあるはをのつからさもあらぬ心もあくかれてかろゝしくわろきことそなどの給てかの御けしきありしふえのろくはいとかたしけなき事にこそそのゝちうちくゝにもあないきこえさせぬはいとひんなき事なりよき日してしゝうの内侍のもとなどにほのめかし給へかしなとのたまへはあなむつかしや有はつへき(く)も覚えぬ世にさやうにさたまりめていかにわひしからんときくにさへそあつかはしきよるのころもなりける御けしきかたしけなかりきといひなからさはかりの御事をうけたまはりてき(34才)「こえさせいてんや中くなめけに侍らんとてすさまじけなる御けしきなれば心にいらぬことなめりとおほすもうへのおほさんこといとをしくてたち

まちにこそいはれさらめさのたまはせてんをしらすかほならんはひか
くしかるへきわざかなとれいならすものしけなる御けしきなればわつ
らはしくてたち給ひぬ

ほかさまにもしほのけふりなひかめやうらかせあらくなみはよると
もなといなふちにくちすさひ給ては、宮の御まへにまいり給へればあつ
けにやこのころこそいたくやせて見え給へとて心くるしけに覺したるけ
しきあくまでらうた(34ウ)「けに見え給を殿のさはかりくまなくみあ
つめ給けんにおやと申なからもすぐれたる御おほえはことほりそかしと
見たてまつり給なつやせはゑせ物のことにかやかたへすしきかせに
したかはんもあしかるへきことかはなと」**か**うしもいひそめけんわたし
もりにやとはましとてゑみたまへるにほいさとこほる、こちし給へる
をめつらしからん人のやうにわかき人々見たてまつる中つかさといふ人
みちのはてなるとなつつけし人のありしこそことほりにくからねとひ
とりこつをしりめにみおこせ給ていかにとかやのこりゆかしきひとりこ
とかなとの給をあなわひしきこえけるにやと(35オ)「わふるさまもに
くからすみわたし給との、女一の宮に御ふみたてまつれとのたまひ(へ)
るこそたゝさはかりのなをさりことたにおほ宮きゝ給てめさましくある
ましきことゝむつかり給ひける物をさやうにほのめかしててはしたな
められたてまつらんこそたゝなるよりは心やましかりぬへくれたゝさは
かりの御けしきにてその夜のめんほくはかきりなかりきかし中くなる
事いひいて、うへもあされたりとそおほされん数ならぬものはすきく
しきこのまでさりぬへからんかけの小草の露よりほかにしる人もなきな
とをたつねいててよすかともなれかしさらすは又いく世もあるま(35ウ)「
しからん世にほたしなからんよしかしとて涙くみ給へるをは、宮御らん
して御かほの色もたかひてたはふれにもゆしきことなのたまひそいみ
しきことなりともわか御心にこそあらめものうくおほえ給はんをあな

ちにもなにかはまいては、宮のさのたまはんにはあるましき**こと**にこ
そは一日三位の物かたりせしつゝてにふえの音のめてたりしにめて、
二の宮のことをほのめかししはいかゝ思ふらんこのころさかりにをか
けにをはするをゆくすゑのたのもし人にゆつらんなどうへのの給はせ
るとかたりしはかたしけなくきゝすこしてやとこそありしかとのたま
かくたにのたま(36オ)「は、いかゝはせむと打なけかれてたち給ぬく
れぬれば内へまいり給つゝてにまことかのよもきか門はいつれそとゝは
せ給へはみをきすいしんこもとに侍るそこと申候しかは又の日みた
まへしかはおろしこめて人もさふらはざりしあやしきにかたはらの人に
とひさふらひしかはつくしへまかりにけるなかとのかみといふ人のいゑ
にさふらひけりめのはらからともなん宮つかへ人にあまた候なる中つか
さの宮のひめ君のめのとにても侍るなりと申せはさやうのものゝきあつ
まりたるおりのわさにや少将のめのととかやいひて大なこんの五せちに
出たりしされものにやなと(36ウ)「おほしやらる中宮出させ給ぬれば
みこさへうちくしたてまつらせ給て三条との、御かたにさはいへとおほ
やけしくきらくしき御有さまなり内の御使日ことにまいりなとして殿
もかゝるほとはこなたかちにそおはします宮の御有さまかたちなどあら
まほしうけたかうはつかしけにてもなし給おほきおとゝの御かたはなか
のこのかみにてもとかしはにおはすれとかゝるあつかひくさももち給は
ねはにや我御有さまひとつをはなやかにいまめかしうもてなひ給てわれ
はとほこりかにをしたちたる御心をきてにそおはしける人よりは(37オ)「
いかてとりていてたる御ものこのみなどしていとわららかに人にくから
ぬ御心をきてなるへしかくさまくにもてかしつき給御さまともをそあ
けくれうらやましくおほしたる中将の君はありしむろのやしまのゝち宮
のこよなくふしめになり給へるもいとつらう心うきにいかにせましとの
みなけきまさらるゝをわか心にもなくさめわひ給てをのつからもやまき

るゝと忍ひありきとも心にいれ給へどほのかなりし御であたりになるものゝなきにやおはすて山にのみそおほさるゝ春宮にまいりたまへれはいりぬるいそなるか心うきことゝうらみさせ給へは(37ウ)「みたり心ちのれいならすのみ侍りてあつきほとはいとゝ宮つかへおこたり侍なりとけいし給へはなにこゝちにかつねにあしかるへきそ思ひ給ことそあらん我にはへたすのたまへとちかうむつれかゝらせ給へは心ちのあしかるはかりは何ごとをかおもひ侍らんこれ御らんせよかくやせ侍しぬへきなめりとてさし出給へるかひななどのしろくつくしけなるさま女もえかゝらしかしと見え給源しの宮はかくやおはすらんとあちきなくよそへられ給てせちにひきよさせ給をあなむつかしあつく侍にとひこしろひ給へる御あはひいとをかしかくやせ(38オ)「そこなはるはかり思ふらんことこそ心えたれなかつみのしゝうかまねし給へるなめりな人もさそかたりしおとゝもかゝればつれなきなめりといまこそおもひあはせらるれとまめやかにの給はするを人のとふまで成にけるよといとゝくるしけれとつれなきさまにてさらぬすきくしさをたにこのみ侍らぬになと有かたき恋の山にしもまとひ侍らんと猶ごとすくなゝるけしきやしるからんあなうたであるやうあるへしとの給はするも御こゝろならひなめりとてわらひたまふ

わか心しとろもとろに成にけり袖より外に(38ウ)「涙もるまでとぞ思ひつゝけるゝ心ならひはけにさもやあらんまことならぬいもうとをもたらねはなといひたはふれさせ給てせんえう殿にわたらせ給ぬればこよひはかひもあるましきなめりとすさましくてまかて給ひぬたそかれ時のほとに二条大宮の程にあひたる女くるまうしのひきかへなとしてとをき所にかへると見ゆるに物みすこしあきたるよりまろかしらのふとみゆるはこの御くるまを見るなるへしはやくやり過ぬるをあやしひかめかとおほすほとにともなるわらはへのもたる物やしるからんこの御どもの

人みつけてかやくとおひとゝむるにえに(39オ)「けておひとゝめられぬ御すいしんのいたくとかめかゝりてしたすたれかけ給へるはやんことなきそうにこそおはすらめさはありともしはしをしとゝめてあやにくにやりちかふるはたそくゝとあらゝかにとへは仁和寺のなにかしあさりの御くるまにてはゝうへの物にこもりていて給ふなりとわなゝきいふわらはのあれはいてさはあま君かみんとてすたれをひきあくるに法師はしりおりてかほをかくしてにくるをこのあま君はなとにくるそをいてはしりのゝしるを御くるまをとゝめてかくなせそとせいせさせ給へはうしかひわらはをとらへてなにもそくゝとへは仁和寺(39ウ)「になにかしめきしと申人なりとし比けさうし給ふる人のうつまさに日ころこもりたまへるかいて給をぬすみいて給なり法師たてらかくあなちなるわさをし給へは仏のにくみ給てかゝるめをみさせ給ふなりかしをしととめてしめやかにやらせ給はてとしころの思ひかなひていそき給ほとに女くるまとそ御らんすらむたゝとくやれとせめ給へは師にはしたかへといふ法文をそうのあたりにとし侍りぬるしにきゝならひてはしらせ侍りつるなりいまよりはさらにくこのしにはしたかひつかはれしとおそろしかなしとおもひたるを(40オ)「かしうなりてゆるしてけり君にしかくゝなん申するくるまにはまことに女のおはするなめり人はみなにけ侍りぬかくて打すてゝはいとをしうこそ侍へけれと申せはなにしかゝるわさをしつるつねにせいする事をきかていくらんところはいつくにかあらんいかてかさてはすてんそのわらはにとひておくれとの給へはわらはのまかりつらんかたもしり侍らすいまさりともくるまとりにありつるほうしまうてきなんこのわたりにかくれてそ候らん御たいまつまいらてくらふなり侍ぬとて御くるまつかまつれといへとぬすまれたらんはいま(か)やうなる人ならん(40ウ)「心ならぬことならはいかばかりわひしかるらんくらきみちのそらにさへさすらふよかくてすてゝは有

つるほうしほいのまゝにやゐてゆかんざらぬにてもこよひかくてあらは
 いかなるこゝちせんなどおほすにいとくをしければをくるへき所もし
 らすこよひはかりはとのへやゐてゆかましとおほすもけさうちかつきて
 はしりつるあしもとおほしいつるもをかしくみちのほとてやふれつらん
 と心つきなくゆゝしきにあすかゝるにやとりとらせんこともかたらひにく
 くおほさるれと猶いかなる人のかゝるめは見るそとゆかしければひきか
 へしあのくるまにの(41才)「りうつりてみ給へはいとたとくしきほ
 となれときぬひきかつきてなきふしたる人ありけりあないをししいかな
 る人のかゝる道のそらにたゝよひ給そいかなることありともひとりう
 すとゝ心うくにけぬる人はつらくはおほさすやよしのゝ山にとは思はさ
 りけるとこそみすてゝまかりなはいますこしおそろしきこともありなん
 又ありつるかしらつきもまろいぬとみはきもこそすれまことに御心なら
 てかゝる事ものし給ならはおほし所をしへ給へおくりきこえんなをほい
 もありあの人とわたらんとおほさはまかりなんと給こゑけはひのきゝ
 ならはずあ(41ウ)「てにめてたきはさはかりにやと見え給ふを誰にか
 とおほえなくはつかしけれとかくの給にきこえすはけにすてゝこそおほ
 せめさらは有つるゆゆしきものゝきてゐてゆかんこと思にかなしければ
 ほのくおほゆるまゝにきこえんとおもへたとゝわなゝかれてとみにも
 のもいひいてられすたゝなきにのみなきまさるけはひなとよそにて思ひ
 つるよりはあてにらうたければくるしうなり給てさらはまかりぬへきな
 めりな御心ならぬことゝきゝつればさもやといとをしきになんになかな
 き給ふこのわたりにそのものすらんよもみすてきこえしとけしきを見ん(42才)「とてのたまへはおほしぬへきなめりといとわひしきにいひいて
 ん所のさまのはつかしき又はかくしうもおほえぬになきこゑはまして
 いとわりなけれとほり川いつくとかや大なごんときこゆる人のむかひに
 たけおほかる所とおほゆるをさらになかてかといふけはひいとらうた

けにをかしきはいかにおほすらんといまそあさましくはつかしきつま戸
 なるへし人あけてこゝにといへはくるまましよせたるに五十はかりなる
 をもとのしなくしからぬさましたる火をいとあかくともしてなといと
 おそくおほしましつる御くるまのをそかりつるかたい(42ウ)「ふの君
 やまいり給へるとてよりきたるほかけすかたのみしらすあやしきもうと
 ましくおほえ給てなき人きたりとてうちもこそすれとくおりたまへとお
 こし給へと火さへあかくてかたはらいたくわりなきにとみにうこかれぬ
 をひきおこし給へればきぬなといとあさやかならぬうす色のなよらかな
 るにかみはつやくとかゝりていとわりなうはつかしと思ひたるけしき
 なとなへてのさまにはあらすたゝいとをかしき人さまにそ有けるあやし
 う思ひのほかなるわさかなたれならんみてやみなましかはいかにくちを
 しからましとおもふ物からさるへきにやかゝ(43才)「るうちつけ心な
 とはなかりつる物をいてやうとましかりつるかしらつきにてなれつらん
 ことおもへは猶心つきなれとかゝる道行人をゝろかにはえ覚ししらし
 な有つる人に思ひをとし給なよとの給ふにいとつかしくておりなんと
 すればひかへてなといらへをたにし給はぬ道のしるへをうれしとおほさ
 ましかはとまれとはの給なましあな心うとゆるし給はねは

とまれともえこそいはれねあすかゝるにやとりはつへきかけしなけれ
 はといふさまそ猶その水かけみてはえやむましうおほされける(43ウ)「
 あすかゝるはかけみまほしきやとりしてみま草かくれ人やとかめんく
 るままつほと人に見せてをき給たれよとており給ぬるをあなくるしひん
 なきものをとくるしけに思たれとまことに御くるまのをくれたりけるま
 ち給とてやかてそのはしつかたにひきとゝめ給へるに月ははなやかにさ
 し出たりをんないとはしたなしと思ひたる物からいたくきえいりたるも
 のはちにはあらすたゝいとなつかしうをかしきさまのもてなしなとあや
 しきまてらうたけなり家の人々いかなることそとあやしかりたちさはき

たり御くるまゐて（44才）「まいりたるにやときゝ給へとかはかりにて
 たちいつへき心ちし給はねは有つるいのりの師やいりこんと物をそろし
 なからとかくかたらひ給女たれとたにしらぬわりなしと思ひたりきみは
 おもはずなりけるちきりのほともあさからすあはれにおほさるゝ事かき
 りなし物きたなくうたかはしかりつるいのりの心きよさもみあらは
 してはわかすくせのありてさる心もつきけるにやとまてあさからすおほ
 さるかねていみしう心をつくしやんことなきあたりよりはならぬ草の
 まくらもめつらしくてそののちはよひあかつきの露けさもしらすかほに
 （44ウ）「まきれありき給よなくおほくつもりにけり此女はうちの中な
 こんといひける人のむすめなりけりおやたちみなうせてければめのか
 そへのかみなといふものゝめにてなまとくありける又なきものに思ひか
 しつきてとしころ有けるをおとこうせてのちはわりなき有さまにてすく
 しければこの仁和寺のいのりのしをかたらひてこれにこの君のことをも
 しりあつかはせければおほけなき心有けるものにて人しれす思ふ心つき
 てかゝるわさはしたるなりけりくるまなとも又かる人なくてうつまさに
 ゆききのたよりをよるこひてぬすみもて行なり（45才）「けり有つるう
 しかひそこにきてもかたりければいとあさましかりけることかなたれと
 いふ人さるわさをし給つらんわか君いかになり給ひつらんいきて見よな
 といひさはきかくをはしたるなりけりそのゝちいきしはをとせねはこ
 とはりにいとをしくて人やりたれと返ことをたにもせねは思ひなけくこ
 とかきりなしこの人かくてやみ侍なは御まへの御あつかひもいかてかは
 し侍らんゆゝしきわさかなはやう源しの宮の内まいりとてやんことなき
 人々のまいりつとひ給なるにまいり給ひねをのれはいつちもまかりなん
 このおはする人はたれそ（45ウ）「とよあやしういたう忍ひ給は御まへ
 にはしらせ給へりやといへはしらすよるつたゝ心よりほかにあさましき
 有さまなれはとてうちなき給をさすかにあはれとみてわれも打なきぬ又

ある人々一日もみかたとをむこにたゝかせ給しにあくる人もなかりしかは
 おはしますをいとひまいらするかへたうとのゝ御ことはしらぬかいたう
 あなつりたてまつらはかとのをさなといてきてこのかとあけさせんなど
 いひはへりければいとこそおそろしくされはまれくあるものもこのこ
 ろはおちてまうてこすいとそわりなきやあてにやんことなくめてたしと
 ても（46才）「この定にてはいかゝはせんとしおひて侍ればゆくす糸の
 ことも思ひ侍らすあつまのかたへ人のさそひ侍にやまかりなましと思ひ
 侍るをたれに見ゆつりてかと思もほたしにてそおはしますやといへは打
 なきてたれをたのみてかはいつくなりともおはせん所へこそはまたみを
 き給はんも心やすくやおほすへき思ひかけぬ有さまをはいかにもあるへ
 きことならねはとの給ふもあはれに心くるしければまことにしるへなく
 たよりなきに思ひわひてみちのくにおくのさうくわんといふものゝめ
 になりてやはいなましと思ふなりけりきみはみなれ給まゝにあはれさま
 さりつゝ（46ウ）「なをさりことにはあらすちきりかたらひ給ひぬへし
 さるはこれにをとるへき人もみ給はすわか心もすくれてこの事のめてた
 しなとわざと御心とまりぬへきゆへもなけれとたゝそゝろにみてはえあ
 るましういとをしく心にかゝらぬひまなくわれながら物くるをしきまで
 におほゆるをこれやけにすくせといふ物ならんかくのみおほえはくちお
 しくも有へきかなと日にそへてえさりかたうあさからすのみ覚え給へは
 我ながら思ひしらるゝものからまたるゝよなくもなくまきれありき給
 こと月ころにもなりぬ御ともの人々はまたかゝる事はなかりつる物をい
 かはかりなる（47才）「きちしやう天女ならんとさるはいと物けなきけ
 しきなるをとをのくゝいひあはすへしかくいふほとにこのめといてた
 ちいとすかやかなるけしきにて見をきてまつるへきにもあらずさりとて
 又かゝる人さへおはしますすめれはいかてかはくしたてまつらんとするい
 かにしてすこし給はんとすらんとはいつゝけて打ひそみなくをしはしの

程たにおはせきらんよにはあるへき心ちもせぬをましていつをかきりにかゝめをかんとは思給らんかくよろつに所せき身をいかにもうしなひてこそいつくへもなといひもやうす心くるしけなればさらはいて立給へきにこそあ(47ウ)「なれ御心さし有けなる人をみすてまつり給てあさましきありさまに引くせられたまはんもいとあるましきこと、おもひ給ふれとかくの給はずればなとさすかにことばりを返々いひしらせつゝたゝいてたちにてたつを見るにさらはいまいくかにこそなと人しれすかそへらるゝにいと心ほそけれとたれとたにしらせたまはぬけしきもさすかにたのみかくへくもあらぬにかくこそなとほめかしきこえんも御こゝろのうちをしらねはつゝましくてたたなにとなく思ひみたれたるけしきなるを猶かくおほつかなき有さまのたのみかたくつら(48オ)「きにやと心くるしけれとまたわか行ゑをもあまの子とたにならねは心くらへにてたゝあはれにおほえ給まゝにいひなくさめつゝこの世ならぬちきりをそかはし給ひけるかかる程に夏もすき秋にもなりぬ源しの宮はふるき跡たつね給へりしのちさやかにみあはせたまはずことのほかなる御けしきをされはよとつらく心うきにいまはたおなしにはなるとひたふる心もいてきてさるへきひまを見給へと人めこそかはることなけれとあさましくうかりける御こゝろはへのうとましようおほされて又いかてかさるみゝをたに(48ウ)「きかしとようゐし給へはいはまの水のつふくときこえ給ふへき人まのほとたにそささらには有かたかりけるひるつかたまいり給へれば大宮もごなたにおはしましてもろともにごうたせ給なりけりとくまいりてけんそつかうまつるへかりけりとてちかやかに給へるにちいさき御木丁なともをしへられてつねよりもはれくしければ宮はいとはしたなしとおほせとはゝ宮の見たまへはれいのやうにもえそむき給はず御かほはいとあかくなりてこもうちさしてこはんにすこしかたぶきかゝりて御あふきをわざとならず(49オ)「まきはし給へる御か

たはらめ御ひたひつき御くしのかゝりなといまはしめたることにはあらねとうちみだてまつることに猶たくひあらしと見え給ふ御有さまのうつくしきはちよを一夜にまもりきうゆともあく世あるましくおほゆるにもあすかゐのやとりはたはふれにてもあるましく覚え給にいとゝしきなみたこほれ給ぬへければまきはしに御かちはたれそなとさてはちはなとまきこえ給へと見つけたてまつり給てれいのまつこと事おほしたゝねは大宮もなをとまきこえ給はてよへ内よりたひくたつねさせ給しはいづくに(49ウ)「ものし給しそ猶かのしゝうの内侍のもとにせうそこのし給はぬはひかくしきことゝむつかり給めりきこゝにはたゝなにことも御心にまかせてと思にいさやいかなるへき事にかとうちなけかせ給へるも人のおやけなくわかうをかき御ありさまなりその御いらへはいかにもまきこえ給はて殿のれいなぬ御けしきなりつるはこのかんだうにこそ侍りけれとうゐんのにしのたいの御しつらいはなに事にかときこえ給へは故きさいの宮に有けるはくの君のむすめはかこつへきゆへや有けんはゝうせてのちいとあはれにてなときこえ給けるをかのうへむかへとり(50オ)「てつれくなくさめにせんとなんの給とそありしさやうのれうにやあらんおのこゝのいとあやしきもあなれと宮の少將にゝたりとてかの宮のこにし給となんきゝしそもさるへきやうや有けんなどの給はずればそれもとのゝ御こにてあれななにかしには似ぬにやあらんはらからあまたもたる人こそうらやましけれとも忍ふへき人たになきにとて物あはれとおほしたるけしきのけにたゝみる人たに心くるしけなる御さまなれば大宮れいのゆゝしきことにくちなれ給へるこそ心うけれとていといまゝくしくとおほしたるをかはかりのことをたにかくおほし(50ウ)「たるにゆくすゑはかくしかるましき心のうちを御らんせさせたらはましていかになとおもひつゝけらるゝになみたもこほれぬへしちいさき木丁に宮はまきれいり給ぬればすさましくてはしつかたに人々と物かたりし

給に御まへのこたちこくらくあつかはしけなる中にせみのあやにくに鳴いてたるをみ出し給て

こゑたてゝなかなぬはかりそ物思ふ身はうつせみにおとりやはするなとくちすさひにいひまきはしてせみくはうようにないてかんきう秋なりと忍ひやかにうちすんし給御こゑめつらしけなきことなれとわかき人々はしみかへ（51才）「りめてたしと思ひたることはりなりさはかりあたりまてにほひみちてむかひたてまつる人はものおもひもわするゝやうなるあいきやうなとをひとへにほこりかにもてなし給はていたくしつまりて心ちよけならす思ふこと有けにのこりおほかる御けしきにておりくはものおもはしけに心ほそけなるくちすさひなとのみし給へはあらきゑひすもなきぬへき御さまなり日のくれ行まゝにひもときわたす花の色くをかしう見たさるゝにそてよりほかにをきわたす露もけにたまらぬにやとなかめいたしてとみにも立給はすむしのこゑくのもせの（51ウ）「心ちしてかしかましきまでみたれあひたるをわれたにともかしうおほされけり月いてゝふけゆくけしきにかのほとなきのきになかむらんありさまもふと思ひいてられたまふおほろけならぬおほえなるへしおはして見給へはおほしやりつるはしるくしとみなともいまたおろさてはしつかたにそななめふしたりけるこさらましかはとあはれにて袖うちかよしこまやかにかたらひ給にひるの御有さま思ひ出らるゝによるつにこよなきめうつしなとにはなにのなくさむへきそとおもひいてられなからわきとけたかくまことしきよりは中くさまかはりたるうちと（52才）「けなとよりはしめ物はかなげにらうくしからぬもてなしなとのあやしきまてらうたくみてはえあるましくおほせは思ふことかなふましくはありはてしと思ふ世にほたしとまでやならむと思ひつゝけらるゝにもろきなみたはまつしるをいかゝ心うらんつねよりも物なけかしけなるけしきのあはれなれはひさしう世にえあるましき心ちのすれはよの人などのや

うなる心はへなともことになくてすくしつるをいかなりけるちきりにかはなくみそめきこえてのちはみすてんことのはれにおほえ給をさらはいかゝおほすへきそをたにのちの（52ウ）「とたれいひけんあふにはかへまほしかりける物をとてをしのごひ給へるそてのすこしぬれたるなとさやかなる月かけにこれは猶きゝわたる人にこそおはすめれわか身のほとを思にも猶たのむへき御有さまかはかやうに覺しすてさらんほとにかりのはかせにまよひなんこそ心にくからめと思へはけに涙とりあへすこほれぬるを（も）はしたなくてかほをふところにひきいるまゝに

花かつみかつ見るたにも有物をあさかのぬまに水やたえなん物はかなけにいひなしたるけはひなとわかひたるものからいとらうたし

としふとも思ふ心しふかければあさかのぬま（53才）「に水はたえせしかくいとうきたることゝおもひ給ともなからへては心のほともいまみ給ひてんならはぬなをさりことなとは人にいふ物ともしらさりけり心よりほかのことをのつからあるともわたくしのこゝろさしはかはらしとなん思ふなと心ふかけにかたらひ給まゝにいとかなしくなりまさりて猶かくとやほのめかして御けしきを見ましと思ふも思ひたつもすこし人々しきかたさまにたにあらず中く覺しやらんにもあさましうはつかしければたゝ行ゑなくてやみなんとおもひとるかたはつよき物からあさましかりける心のほとかなとしははいかにおほし（53ウ）「いてんすらんとおもふにせきやるかたなき袖のしからみを君はたゝひとへにわかひたるさまにてわか行ゑなきもてなしなとをつらきかたに思ひたると心え給ひてとかへる山のしゑしはとのみちきり給ひけりまことやかのおほきおとゝの御かたにははくのひめ君むかへとり給てにしのたいのたまをみかけるにしつらひすゑ給てみ給ふにあてやかにさてもありぬへきさまなれはとし比のほいかなひてはれくともてかしつき給さまよつかぬまてみゆるとのゝうちにも世の人もいみしかりけるさいはひかなとめてけりと

しは廿にそなり給けれといた(54才)くおほときすきてあまりいはけ
 なく物^はかなきさまにてけにおほろけに思ひうしないうむ人のはか
 くしきなくはうしろめたけにそおはしける心におもひあまることあり
 とも色にいたし給へうもあらずことのほかにあさましきことなりとも人
 たにもてなさはをのつから忍ひすくすへくおはするをよき女のかしつか
 れ給たるはかくこそおはすへけれとみゆる物からあまりむもれ給へるけ
 しきなどはかくはなくともてなされ給へる御有さまにはたかひてゆく
 すゑやいか見なされ給はんときくるしかりけりまたなき物に思ひかし
 つき(か)れたりしおやの御もとに(54ウ)てたにかくはるけ所な
 りし御心はへのまいてにはかにはくにもをくれかなしくせしめのとも打
 つきうせにしかは心のうちにはいとかなしかりけるにまめやかに思ふ
 人たにそはてかくしらぬ所にむかへられて有つかすはれくしくもてな
 され給にいとわれにもあらぬ心ちしてほれまとい給へりうせにしはの
 なましそくのたかきましらひして人数ならて世にありわふるさすかにゆ
 へつきもの見しりかほにてかたはらいたき物このみさらすともとおほゆ
 るありけりをはのあま君かゝる人よひとりてそへたるけにゆへくしく
 はしろにそひてわたりたる中(55才)中見くるしきをうへ時々見給
 にいてやとものしく見たまへは(と)こまかなる御心さまにはあらてさ
 すかにおほとかにて人の有さまなとはいたうも見しり給はす心をやりて
 うへはかりはかしつき給にこの御はしろそあしくせはかたはらいたき
 ことも有ぬへかりける心にまかせたるつくりおやともしたてたるわかう
 とのおもひやりすくなきかきりかすもしらすあつめさふらはせてよると
 なれば殿上人諸大夫までいたしあはせてさくけしきともいといまめか
 し君はたゝあかこのむつきにつまられたる心ちしてあれにもあらずまか
 せられ給へりしつらひ有さまな(55ウ)のめてたくおなしわか身と
 もおほえぬなどを人しれぬ心のうちにははしやめのとなとにこれを見せ

たらましかはいかて人なみくになさんとあけくれいひ思ひたりし物を
 よしなき人にまかせられて心におもふ事もいはまほしきこともつま
 くはつかしうてやみにむかひたるやうにおほゆることとおもひつて
 は忍びてうちなき給けりされとたゝみるにはうつし心もなきやうにてそ
 おはしましける九月ついたちころなをしものゝあるに中将の君中な
 になり給ひにけり大殿これをもいまくしけにおほしたれとさのみやと
 てしたいのまゝにあ(56才)かり給なるへしよろつこひ申に内春宮な
 とにまいり給とてつころひたてゝまつとの御かたにまいり給へるにか
 たち有さまなとつかさくらゐにそへてゆしけにのみ光まさり給をこと
 いみもしあへ給はぬけしきにてたちぬつころひ給けしきそことほりにも
 すきてかたしけなくあはれなりける大殿の御かたにまいりたまへるつ
 てにこのいまひめ君のすみ給にしのたいのまへを過給まゝにいかやうに
 かとけしきもゆかしければわたとのよりすこしのそきたまへはみす所々
 をしはりて人々あまたけはひしてこほれてたりかのきさいの宮の人々
 もあ(56ウ)またなんわたりまいりけると人のかたりしも心はつかし
 うまた見給はぬあたりなればようゐしてあゆみいて給へれは人々見つけ
 ていりさはくけはひとものさはかしきをあやしとみ給に木丁とも
 おくよりとりいてゝかはくそよくとたてわたしすそうちひろけひも
 とものよりはれたるをとひきかくひき廿人はかりたちさまよひつころひ
 さはくきぬのをと木丁などのをとに物もきこえずあはたしくみつかぬ
 心ちし給へといまやそゝきやむと物もいはてつくとゐ給へは^から
 うして木丁たてゝのちをのゝきぬのすそ袖く(57才)ちわらはへのか
 さみのすそなどのみたりかはしくなりたるをつころひめてこゝかしこよ
 りをしいてわたしやうくのとまるにやとおほゆるほとに木丁のほこ
 るひをはらくとゝきさはくをともしるくてひとり(つ)ほころひより
 五六人かほをならへてまつわれみんくとあらそひたるけはひともの忍

ふるからにいとかしかましからうして見えたるにやあらんまことにめて
たかりけりあな物くるはしや日比みつる殿上人などはたつちなりけり
とさゝめきあへるいとをしうおほえて此みすのまへはいままでうるく
しう侍けるもとかめさせ給へくやとらみまいらするな(57ウ)との
給御けはひけにおほるけの人はふといらへにくけにはつかしけなれはに
やそこらいいいしときこゆる人御いらへきこゆるはなくてそゝやまろは
ふようなり君の給へくとつきしるひさゝめきたちてにくるともゝあり
あなわりな物にくるふかまろはましてふようなり《こせたりイ》とてそゝ
はしるなれはきぬのすそをとらふるにやたふれぬきうくとことさゝめ
きわらひいりつゝしはふきにしいるもありあるは又あなかまやくとさは
かりはつかしき御有さまになへてのほとゝ思給かなともせいすなりさま
くゝあやしき心ちし給てしりめはつかしけにみい(58オ)れつゝなけ
しにをしかりてゐたまへるけしきこのみすのまへにはあはすそありけ
る猶たゝきえいりくゝあふきなと打ならしつゝわらひそほるゝけはひと
も物くるをしけれはこはいかにとようるまのしまの人とおほえ侍かな
とてすこしほゝ糸み給けしきなとみすのうちはつかしけなりおくより人
よりきて木丁のまへなる人にたゝうらみをはゝとよみかけよとさゝめく
なれはわきみそなめこ糸はよきまろはさらにくゝとわらひいれはあな
まはゆの色このみやとてかたのわたりをあふきしていたくうつなれはた
うしは君な(58ウ)しとてつむなるへしあしうしてけりいたしくそ
こははなてくゝ忍ひあへぬこ糸いつくならんとをかしきにしぬへければ
たちのきなんとするほにおとなしきこ糸のたかやかにしたりかほなる
いてきていてやさふらふ人々からこそよき人はをかしき名もとらせ給わ
さなれかはかりにてはわかうとたちさふらひ給はて有ぬへしとさすかに
忍ひてにくみわたしてさしよりてきこゆめつらしき御こ糸こそおほした
かへたるかとまで

よしの川なにかはわたるいもせ山人たのめなる波のなかれてとけに
はゝとよみかくるけは(59オ)ひしたとにのとかはきたるをわかひや
さしたちていひなすこれそのはゝしろなるへしときゝたまふ
うらむるにあさゝそ見ゆるよしの川ふかき心をくみてしらなんおほ
つかなき心ちし侍るにうれしき御けはひと思ひ給へるにものをこそあし
さまに申ない給ぬへかりけれとの給へはさはやかにうちわらひてさらは
いまよりのけさんもまめやかにつとめさせ給へかしわかき人の思ひむせ
侍めれはいぬもきてとかやたかやかにいふあやしきたとへなりまめやか
にはおもてふせにやおほさんとていまゝてまいらざりつる(59ウ)を
けふはかはるしるしにも御らんせられになん御前わたりにもかくときこ
えさせ給へこのみすのまへもならひ侍らねはしたなく思ひ給ふれとか
くこんのうすきにけふはかりはなくさめ侍をいまよりのちそうらみ申へ
きとてたち給におきのはかせあららかに吹うこかしたるににわかみす
をたかく吹あけて木丁もたふれぬれとゝみになをす人もなしあなわひし
あれをみたまへといひつゝわれくゝはきぬを引かつきつゝひとつにまる
かれあひたるをのとくゝとみいれ給へはかうそめのにひ色のひとへく
れなひのはかまきは(60オ)みたるをきてひるねしたりけるか人々の
さはくにおとろきてあへなくおきあかりたるをいとよく見あはせたるあ
さましきにやとみにそむきなともせずあきれたるかほいとをかしけなめ
りこちなわさやとは見えなから女はうのけはひともしよはこよなくみ
つへかりけりとおもひまし給ぬかのせうとのかこちけんゆへにや少將に
そよく似たりけるとのゝ御子とはいふへくもなかりけりとみるにたゝな
らすや思ひ給ふらんやうのものとおやししの心やと我ながら心つきなしはゝ
しろからくして木丁なをしつればたちのき給(60ウ)ぬ又の日とのゝ
御まへにて昨日のことゝも申給ふつゐてにかのとうるんにはものしたり
きやにしのたいにすむなる人をこそまたえとふらはねいかやうなるけし

きに見ゆるとの給うちく有さまのいとあやしきを子ならもいかに見給ふらんと心はつかしうおほすなるへし木丁のほころひあらそひしすきかけともおもひいてられ給ていとをかしうねんするけしきやしるからんうちわらひ給てよしなきものあつかひこのみ給ほとにたかためも中くなることもやとこそ見ゆめれとし比もかういふ物ありとはきししかと(61才)「おほえぬことなればかやうの人のすくなきさきはひにもとりいてぬをなにしたよりにかくもありそめにけるにかいとありつかすやとうめき給もけにときけとあさましとあきれ給へりしかほはさすかにくむへうもなかりつればつれくにおほしめさんにこと人よりはなとてかあしうも侍らんだしかなる名さししてさすらへたまはんもいとをしう侍るへしとその給いさやかういひそめけんもおほえなくそあるやよめに見しかは宮の少將にそいとよくにたりしせうとのしれものあんなりそれはかの宮の御子とそいふなるこれも(61ウ)「さるへしなとの給まことかのあすかぬにめのとみないてたちて君をはとむるをたれもいかにしてかはあらんとなくくしたまひきこえ給もことほりにいとをしさりといまは我とまるへきならねはわりなきよしをいひきかすればさはわれもいてたつへきにこそと覚したつに人しれぬ音のみ鳴て思ひなけきたるけしきいと、おしきをみるにさらはなにかはくたらせ給京もたよりなくてひとりとまりたまはんこそうしろめたう侍れ又われもいかてかともおほきぬ女は千人のおやめのとやくなし御おとこをはせぬほとなりまして(62才)「かくやんことなきたのもし人にもおほすなり御心さしもねんころなるめるをひきはなれてあつまちに立そひ給はんいとあたらしうかたしけなしなとさすかにあるへきことはいひなからいかに思ひかまふることにかあらんこの人をはするよるあかつきのかとをもころやすからすかきうしなひかちにもてなしてつふやくけはひを御ともの人々きゝてめさましくあさましきにふみこほちていらまほしきおりくありけり

殿にも忍ひてたれと思ひ侍るにかかくなと申せは女のけしきのあやしきもこのほかけのおい人のな(62ウ)「をありしいのりのしにとらせんとするなめりさやうのこといひはえいててむすほれたるなめりと心え給にいと心つきなくゆしけれと女君の有さまのいてやされはとてやむへくもおほされねはしらすかほにうせまかせたらんもうしろめたくいかにせましきふらふ人々のつらにてやつほねなとしてとおほせとさりとてもていて、あつかはせ給はんこともいと、は、かりおほく人しれす思あたりのき、給はんにはたはふれにても心と、むる人ありとはきかされたてまつらしと思ふ心しふかければさてもえあるましさらてはさすかにこ、かしこともてあつかひ(63才)「給はんもいかにそやおほされつ、今をのつからわれとしりなはえいとほしかくろへぬへき所もあらはありさまにおい人のにくむしたかひてなとおほすなるへし女君にもまろいとふ人のあるなめりなことはりなりやたのもしけなりしいのりのしを引たかへてかくものはかなき身のほとなればをとなしのさとたつね出たらはいさ給へよわつらはしき人のさすかなるかあればしはし人にしらせしと思へはかくおほつかなくあたなるものに覚したるもことはりなりわれはなに事にてかあなかちにしられしとおほさるへきいひしらぬしつめ(63ウ)「なりとも是よりかはる心はあるましき物を猶たのむ心のなきなめりとうらみ給へはさそふ水たにあらましかはともあはれに思ひて猶別当の少將とおもはせ給へるなめりせいする人のありとの給ふはとおもふにもうちたのみて行かたをも思ひと、むることあるまじうおほえなからいとかくめてたき有さまにてなつかしうあはれにかたらひ給を行さきめやすからんにてたにいか、あはれならさんもりのうつせみとなみたのおちぬへきをまきはしたるけしきいとらうたく心くるしけなりかくいふほとにこの女君た、ならすなりに(64才)「けり打はへてもののみ思ひてありしさまなるけしきにもあらぬをた、誰もこのいてたちを思ひなけ

き給へるとおもふにめのとみしりていてあないとをしやかかきさへならせ給にける物をいかせさせ給はんする君になをきこえあはせさせ給て御けしきにこそはしたかひ給はめたれなりともかくなり給へるときは給てはよもあたしくも思ひ給はしといへとたゝいかなりともたのむへきありさまならはこそあらめさらはともみえぬ山ちのみこそよからめといふ物からかうさへなりにけるを露しらせたまつらてやみなむことなどいみじうおほゆれとかけ(64ウ)「てもましていひいつへきならねは日をかそへつゝなきなけくよりほかのことなしこのの御めのと大二のきたのかたにてあるなりけり子ともあまたあるなかに式部の大輔て来年つかさうへきかかやうの人の中には心はへかたちなとめやすくてすきくしう色このむありけりいかなりともかたち心すくれたらん人を見んとてめなともなくてすくすにこの女君うつまきにこもりたりけるをのそきてみて思ふさまなりければせうそなともせしかと身つからはきゝもいれぬにこのめとはいとみゝつきにおほえけれとたゝいまかくたのむ人にてあるそうのいひち(65オ)「きりたればえいなむましくてたちまのことうけはせねとつかさえてくたり給はん折はざりやあらんなどちきりけるにかくこと(も)たかひて身はいとたよりなしなまきんたちのかくろへて時々よなくおほするはいとふさはしからねはあつまおとこにやつきていなましとおとすなりけりされと式部の大輔のおやのともにつくしへくたるに思ふさまならん人もかなるてくたらむとせうそこいひおこするにいとおもふさまなる心ちして別当の御子の少将なんかよひ給へはさらてもやとあるましきさまにきこえさすれとまことにさもおほさはひめ君にかくとはしらせたて(65ウ)「まつらしくたり給はんほとにむかへ給へといひければいみじうよろこひてさやうのほそきんたちのかけめにておはせんよりはたゝ心み給へをもとの御さいはひにてこそはおはせめなどことよくかたらひていてたちの物なといとよけにおこす

れは心ゆきてかみしもの人もとめあつめなとしけるをかけたもしる人もなかりけり式部大輔のもとよりはくたりもちかくなりぬるをたかへ給なと日々にいひおこすればたゝあなかまくしよもたかへきこえしそのあか月に御くるまをたへさりけなくてふとわたし奉らんといひやりつゝ心のうちにはみないてたちたり(66オ)「さて君にはあつまへのいてたちとまり侍りぬたゝならすさへおはしますにいと心くるしうこのことは申はなちてやりつるなりいまはいかにもおはしまさむをみたてまつりてまかるへきなめりと心ゆきたるさまにていへは女君はまことと思ふに心すこしおちるたまひぬ打はへ心ちさへなやましかりつるもをしからぬ身はいかにもなりなはやといそかれつるもかくなりにけりときゝあらはしてはあはれなりけるちきりのほとさへおもひしられてうき身とおはれつるはすこしいたはしう思ひなりぬるもあはれなりのちたへすなりて御心のほと見はて(66ウ)「すやといまより心ほそくおもふへしのわきたちてかせの音あららかにまとうつ雨も物おそろしうきこゆるよひのまきれにれいのしのひてまきれいり給へりいづもなよくと忍ひやつし給へるに雨にさへいたくそほちぬれてにほひはかりはいと所せきまてくゆるみちたるをとなりの山かつともゝあやしかりけりつねにあさやかならず打とけたるよひのころもてあたりもかやうなるは見ならひ給はぬさへなつかしく心くるしきけそひてあはれはをろかならずかやうのありさまはまたならはざりつる人やりならぬわさかなとてぬれ給へる御そときちらし(67オ)「てひまなくうちかさねても心より外にへたて(つ)るよなくもわりなきをさは思ひ給やかはかり人に心とゝむる物とまたこそしらざりつれなとつきせすかたらひ給さまあはれにて

逢みてはそてのぬれまさるさ夜ころも一夜はかりもへたてすもかなわりなき心いられなとはいづならひけるそとよなどのたまへは

へたつれば袖ほしわふるさ夜ころもつるには身さへくちやはてなん

といふも物はかなげなりよしみ給^ハよ世のさためなきこそけにうしろ
 めたけれとなりなき心はへなとはいかなる人のつかふわさかなとの
 給をもなをさりことゝも(67ウ)「あなかちにとらすうとくしきさ
 まにもあらず心のうちやいかならんめのまへはたおなし心なるさまに
 もてなしてかくさたかにいひしらせ給はぬをもとやかくやとあなかちに
 もたつねしらす又わか身の行ををさりていはぬものからなよくと
 打なひききこえたるさまなとあやしうさまことらうたけなるをみつ
 まゝにかきりなき人々の御有さまにもをとるましくてわするへき物とも
 おほさざりけり夜の夜ふかく帰給てわか御かたに打ふし給てすこし
 まとろみ給へる夢にこの女わかかたはらにあると思にはらのれいならす
 ふく(68オ)「らかなるをこはいかなるそかゝることありけるをいまゝ
 てしらせたまはざりけるかゝるちきりなりければ何か行すゑもうたかひ
 給とて夢のうちにもいとあはれと思に女

ゆくゑなく身こそなりなめ此世をは跡なき水をたつねてもみよとい
 ふと思ほとにとの御かたよりあすはかたきものいみなりけるをわすれ
 させ給へるかあなかしこくとより御ふみなどとりいれさせ給ふなどの
 たまへるにふとさめてむねのさはけはをさへてうけたまはりぬるよしき
 こえ給へと心さはきしてあやしかなることそまことにれいならぬこと
 やあらんと(68ウ)「いまぞ覺しあはすることも有ける心ほそけなりつ
 るはいかなるへし(き)にかあらむなとつねよりもおほつかなくゆかし
 きに夕さりはえおはすましければこまやかに御ふみかき給つねよりもい
 まもみてしかなとなんよざりはかたき物いみなればすさまじうなん
 あすか川あすわたらんと思にもけふのひるまは猶そ恋しきまことと
 くかたりあはせまほしき夢をこそみつれいと心もとなくなとこまやかな
 れと御かへりことはたゝ

わたらなん水まさりなはあすか川あすはふちせになりもこそすれそ

のわたりとなくすきひ(69オ)「かきたるもさうなとわさとよしとなげ
 れとなつかしうをかしきさまに見ゆるは思ひなしにやかしこにはつくし
 の人あかつきになんゆめくたかへ給ふなといひければたあか月にさ
 りけなくてくるまをふとよせ給へたかふといふことはあなゆしといひ
 やりて女君のひとりなかくめふし給へる所にきてあすのまたつとめてこの
 にしに井ほるといゑあるしもほかへわたりけりいかせさせ給はんす
 るくるまのことをたれにかいはましあはれかやうのおりにこそいきしは
 思ひ出らるれかくのみ世の中のたよりなきにこそおもはぬ山なくわりな
 けれいみしう思へと(69ウ)「女は思ふことかなはぬかくちおしきそや
 かゝれはえせ宮つかひ人は忍ひかたらひ人はまうくるそかしまことゝ
 かのするかゝめこそものゝなきけりていはむことはきかなといひし
 かいひやらんさてこのくら人少將との御めのとのいゑかりてしはしわ
 たし奉らんなてうことか侍らん年比のいみしきする人なりしをこの御こ
 とののちなかくいとつゝましくてをとつれぬをかくとやきゝたらむさ
 るにてもあしかるへきことかはなといひちらしてたちぬるをあなくるし
 ありきもこりにしかはなにかつちいまでもありなんましてそのしらぬひ
 とのいかてかとのたまへはあなまかくし(70オ)「やたゝなる人たに
 もつちいまぬはあるものかまいてかくおはします人はあなおそろしく
 といふよろつよりはかの少將と思ひていかなるひかことかいはんとすら
 ん夜なくの月かけもつねにまへわたりし給ふ御ひかりにみあはずれば
 たかふへくもなきものをものくるをしくよしなきこといひ出てやとかめ
 ん程いかに見くるしからんとおほせとせちにもいかてかの給はんあはれ
 に物はかなかりける有さまのみ思つゝけてかうまでもさすかに見え奉る
 ちきりはあさからすわれなから思ひしらるゝをこのことまことにさもあ
 らはざりともおほしからすまへ給やうも有なんかしの(70ウ)「給ひちき
 りありさまもいつはりにしもあらずやなと身もすこしいたはしくなりに

たるをこのたのもし人の心やいかにもてなしはてんまたわか身を何とかはさはかりの御有さまになからへて思ひかすまへ給はんつぬにはいかやうにならんと身のほてのはかくしからさん物ゆへ行ききのあらましことに袖もぬれて源しの宮の御かたへと思ひしもかやうの人に見え奉らんことのはつかしきに思ひたすなりにしをけにかうをもはすなるさまにても見え奉りけるいまはまいていつくにもくさやうのすちなと思ひかくへきにもあらずかしなといひくくのはてく（71才）は山なしにうしろめたく心ほそく思ひつくるにおそろしきことなるつるてにしなはや世にあらずなりなんことのみこそ人をも身をもうらみはてすしてはやまめなとつくくときしかた行す糸思ひつくるに枕の下はつりもしつへくなりぬめのときてよろつ物の物とりしたためさるへき物はぬりこめにをきなとしつゝ京のうちは一夜はかりとおもふましきものそやまいてこの井は五六日にもなりぬへかなりつゝなとたてんまでこそおはしまさめくるまもありかたきにたひくありかせ給はんもうるさからせ給めるになといへは君この給へる所へかそれならは猶（71ウ）「ましとこそ思へしらぬ所にいかてかさてはあらむとの給へはさおほしめさはときはとのにわたらせ給へといふは故中なこんのりやうせしにし山のわたりなりけりいさまたそれもひんなしつちをいましと覚しめさは御心なり女か申さんことははかくしきことあらしとかくおはしまさんおりの有さまをまさかそれにそれまでいきて侍らばあやしの女のみこそみたまつりあつかはめとおもひ侍るかいとまかくしきそやさらぬたにこそこうむところにはとくうといふ物はかならずいてくるそかし御いみのはうにてさへあるよこのたの（72才）「もし人の御心はへさやうの程とてもかひくしくもてあつかひ給へうこそみえ給はねいひおもへは女のくにてそ侍らんかやうのきんたちはおやなどの立そひてたのもしきわたりにだにすこしもうしろみやめはうちすて給ひついでやまいてなにかす

とか思ひ給はんあなおこかましや又御ころさしあらは所かはるともおはせざるへきことかは恋こそみちのとこそいふなれとさすかに打わららひていふかくほかへいきにくするはこの人によりいふと思なるへしと思ひ給ていてそのことにあらずやあやしき有さまなめれ（72ウ）「はありきも物うくおほえしをいとゝいさや物こりしてとの給へはさてそれはあしくやは侍るされはこそかゝるさいはひも御らんすれかしこはわかき人のおはしかよはん中くをかしかりぬへき所なれば打忍ひて二三日おはするやうもありなむなにかしそれかしとゝめてはへれば御使にそこくとをしへ侍りなんおはしましたらんにもよくゝあむない申せよといひをき侍りぬなとゝむるすんさ《けすい》ともよひたてゝいふもいとゝかたはらいたければさまてたつぬる人もあらしといとゝおほつかなき物にの給を行ゑなくむかし物かたり（73才）のやうにことさらめきてやおほされんまことにかくときこえはやとおもふにも

かはらしといひしるしは待みはやときはのりに秋やみゆると思とかへる山のとありし月かけはこの世のほかになるともわすれ給ましきをいかにしなしつるそとあやしう心ほそくて火をつくくとなかめてなみたくみ給へるまみのけしきのいとらうたけなるをめのとさすかにみおこせつゝ心もしらぬ人にうちまかせきこえてはるかなるほとにいてたちたまはんはくちおしき御さまかなと涙くまれけりあか月にくるまのをして門うちたゝく（73ウ）「なれはいてあはれ人のためにま心なるるかとのうへかなあまりとうさへ給へるよとてひきいるゝをきくにもむね打さはきてあすか河をこゝろもとなげにの給たりつればよさりなとほれいものし給はんにかやうにいひてかかへり給はんなど猶ものうきもうたてある心かなめのとの物いひもはつかしなからおほつかなくてものしなんことはくちをしく心より外の身のあやしきなればとまつ思ひつゝけられてうこかれぬをつまとをしあけてさらはとくわたらせ給へ人のい

そき待るにひさしくならんもいとをしといひてあさやかな(74才)る
きぬとももてきてくしのはこやうの物なとくるまにとりいれなとしてた
いそきにいそきてをそしくとおしいつるやうにすればわれにもあら
るさりいつるもなにとおもひわくことはなけれと心さはきしてむねつと
ふたかりたる心ちすとりもいまそなくなる

あまのとをやすらひにこそいでしかとゆふつけとりよとはこたへ
よ猶たゝいまなとはきこえまほしきにとみにものりやらす涙せきやらぬ
けしきなるをましていかにとみちのほとの有さま思ひやるにめのと又人
ひとりそしりにのりぬるかどひきいつるよりやなくひな(74ウ)とを
ひいひしらすおそろしけなるすかたしたるものとも数しらすおほくて火
はひるのやうにともしてあけはてぬさきにとくくといふけはひとあ
やしうものおそろしきにこはいかなることとたゝかきくらす心ちすれ
はきぬを引かつきてふしたるにかの行かたしらぬとありしをぎゝはしめ
たりしより打はしめ月ころいひちきり給へりしけはひ思ひ出られてわか
身はいかに成ぬるにかと思ふかいみしきによとゝいふ所にいきつきぬれ
はふねにのせんとてのゝしりあひたるにされはこそときはにはあらさり
けりと思ふに物もおほえ(75才)「ねとめはみゆるにやきしにふねよせ
てのせうつさんとて年廿はかりなるおとこのそゝろかなるさまかたちな
るいといみしう心行たるけしきにもてなして大二殿はいまはとりかひと
いふところまではおほしぬらん中なこんとのゝ御ものいみのかたよ
(か)りつれはとみにもえいてゝをくれ奉りぬるよ御きそくのよろしか
らさりつれはいとまもえ申いつましきなめりと思ひつるにかうみやうの
御むまをこそたまはせられたなといひてをくりの人々なるへしおなしほと
なる人々とむかひみてえくちのわたりのせうえうはこのたひはふような
めれ(75ウ)「は大貳殿のいそき給めりなとほこりにか打わらひたるけ
しきのつきくしさに物ならん行幸賀茂のまつりにけひみしのへたう

のしりにこそかやうのおそろしけなる物さゝけなとしてあるものこそか
るかたちはしたれみるたにうとましきくるまにきてさらはとく御ふねに
たてまつりねとてかきいたきてのせうつすほと心ちいかはかり有けん
めのと心ゆきたるきそくして物いひえわらひなとするもねたうかなしと
はよのつねなりいかなるものゝいつれのせかひにゐて行にかあらんとす
へていひやるかたなきにおきはしりて河にもお(76才)「ち入なはやと
おもへとたゝいまおとし入て見る人あるましければかしらをたにさしい
てすひきかつきて物したりおとこそふひしてえもいはぬことをいひなく
さむれはいとゝなきまさりてあやにくなるけしきなればさの給ふとも
たけきことよもおほせしと思へはいとおこかましやなにかしの少将のか
けめにてみち行人ことにこゝろをつくしむねをこかし給はんやはあやし
くとも又なく思ひかきつききこえんをとりとこころにておほせかしま
きんたちは中中心あしき物そ殿のおはしまさんかきりはをのれらをそ
のきんたちはえこそあなつら(76ウ)「さらめさはかりの少将にならん
とおもはゝなりぬへしよしみたまへよらいねんは焔のほりて五位の藏人
になりてそのぬしといつれかまさりたるさなりいてゝみせ奉つらんくち
おしうほいなしとおほすともいまはいふかひなればたゝおひらかにも
てなしていとしなくしからぬやうにても御心にあかぬことなくやすら
かにてすくさせ給へきむたちならずとてをのれをわろき物に人思ひたら
ねはかやうに女にまたこそにくみならはされぬ御まへたちよりもまさり
てやんことなき人たちわれもくといひ侍つれとうつまさにて見奉りそ
(77才)「めしより思ひしみにし心のなをりかたくかくめいほくなきこ
とをみ侍こそ猶これ申なし給へなといひあたふかつき給へるきぬをせち
に引やりて見るにほのかなりしよりもちかまさりしていとらうたけにを
かしけなれはうれしくていかでとく思ひなくさませてあかぬことなくか
しつきてみんと思ひけりおとつれくなりしなこりなくそのわたりの

ものともどくきあつまるをもてあつかひたる心ちいとうれしくおもふさまなるにこの女君の御有さまのいとあきたくあやにくなるをいかにみ給らんさはかり我もくとむこにほしかりし人（77ウ）」をすてゝかゝる御けしきをみ給はさいはひとこそおほすへけれあらみさきといふものはなたぬ人はかうこそあなれよかるへきことはあしくそおほゆなるなど人々いひてなげくをきゝておとゝたにもさしいて給へやかくこそ心うき御心ならんすらむとこそおもはざりしかほいなきやうにはいかておほさゝらんざりとてあまりあやしやとてものしけなるけしきなりかはこなとやうの物あけさせて人々のえさせたりけるあふきたき物なとりいたしてはかくしからねとある人々にもし給へかゝる人をはすへしともしらせざりしにいかてかしりけん忍ひて人いてくなり（78オ）」とてそれかしかれかしなといひてとりちらすなかに女のさうそくの心ことなるかあるを中なこんどのゝたれとはしらねとゐてくたる人にならすきせよとて給はせたりつる御心さしのまゝにたてまつり給へ御涙にいたくしほれぬめりなといふをけになへてならぬ色あひにこそ侍けれなとめてゐたり又この御あふきはもたせ給へりつるをあたらしきよりはと申とりたりつるをはつかしき人にもこそあれいたうしほれたりとおしませ給つれとかたみにみよとの給はせつるはかなくうちもたせ給へるかやうの物さへそなへての人にはにさせ給はぬやなといふをきくにも（78ウ）」これはさはうつまさにてもきゝし物にこそあなれこと人にてたにあらてあな心うの身の有さまやおもふにいとかなしくてなきめたるにこのあふきをさしよせてこれ御らんせよやいかにしてひともしもみはやと女のたかきもくたれるも心をつくしきはく御てよこれみ給てはまるかにくさもなくさみ給てんといふをまことにわかみしをなしてにやとゆかしきに人めもしらすおきあかりてみつへくおほゆれとかほなとのあきらかにみえぬへければ猶なきふしたるをわか君をこそかやうにいのちにかへて恋かなし

まめそのあをひれおとこによりていのちたえぬへく（79オ）」見え給こそかへりては心つきなけれ何ことをさまては思ひ給そまるかかほはそれにやをとりにたりけるとみ給へくとあたへてきぬをせちにひきあけんとするに神仏かゝるめみせてうしなひ給へとなきこかるゝさまのあまりうたてけなればむつかりていてぬるまにこのあふきをとりてみればひと夜もち給へりしなりけりうつりのなつかしさはうちかはし給へりしにほひにもかはらすさうにもまなにもかきませ給へるをなくなくみればわたる舟人かちをたえと返々かゝれたるそのおりはわれとしりてかゝれたるにはあらしをされとたゝいま見つけたるはことしもこそ（79ウ）」あれいかてかかなしとおほえさらんかほにあてゝなかるゝさまもみなおちぬへし

かちをたえいのちもたゆ《たえぬ》としらせはやなみたのふちにしつむ舟人

そへてけるあふきのかせをしるへにてかへるなみにや身をたくへまし

なとおもひつゝけるゝにも物のおほゆるにやとわれなから心うしあすか川のわたりをなけき給へりしおりかゝらん物とはおもはざりしにけさも御ふみ有つらむかしいかにいひてかへしつらむ打きゝ給ひていかにおほしつらんと思ひやるはいかゝはよのつねの心ちせん（80オ）」

うみまては思ひやいりしあすか川ひるまをまてとたのめし物を心えぬ夢とありしはいかなりけることにかきゝたにあはせてやみにしいふせさをいかにせんとなきこかれてもあまりそあるかくれいならぬ有さまをいかてしらせたてまつらしと思ひけんさらは今すこしあはれとはおほしなましとおもふにもうちかへしもしいのち思ひかなはてなからへは行すゑにきゝあはせ給ふやうもあらはさてこそあむなれときかれ奉らんもいますこし心うかりなんかしなとてしらぬあたりの物にてたにあらてかく

したしくてきゝあはせ給ふへかりけるゆ(80ウ)「かりにしも有けんをき程までいきつきてこのありさまみあつかはれぬさきにたゝいかにしてもしめるわざもかなと思へはかくて四五日にも成ぬれと水などをたによせずめのはきつゝよろつにいへといとかく心うかりける心をしらてとし比おやのおなしことに思ひたのみてすくしけるさへくやししく心うかりければかなしくつらくてきゝもいれられすたゝ引かつきてなきふしたりおともしはしはいかて心ならぬことなればひんなしとは思はさらむさのみはあらしざりともとおもふ程にかくいとあさましくていのちもたえぬへきさまなればかくまで思へきことかは(81才)「とあやしく心つきなくおほえてあやにく心もつきまさりてとかくひきうこかしうらむれは思ひわひてをしはかり給めるやうにいとかくおもふへき身のほど有さまならねばひんなしなどにはあらす心ちのれいならすのみありしかいとゝまさりて昨日けふはいとゝなからふへき心ちもせぬをいまはいかにも御心にこそあらめいとかうおほゆるほどをすくし給へ人けちかきはいとゝくるしうのみおほゆるはいかになるへきにかとてなくけはひなとけにたのみすくなけにきえいりぬへきけしきなればたゝならぬ人はつねに心ちなんあしくするときくはさやうのにてかゝ(81ウ)「るにやいとかく物なともくはてさやうの事なんいとあしかんなる物をなとさすかにいとおしくていたうもあやにくたゝてひとひもなみにとすさひにたるあいきやうなくゆゝしくたひそうともにいのりせさせなとよろつにもてあつかひつゝ又はひよりてとさまかうさまにうらむるを聞たひことにいかにせましかくうきをしらぬいのちなかさにてはつるにいかになりなんと思ふにすへきかたなければこのうみにやおち入なましとおもひなりぬきやうには夜もすかられいよりもおほつかなくおもひあかし給て又の日はいつしか御ふみつかはしたるに門もさして人の音(82才)「もせねはあやしうて猶たゝけはいみしけなるけすそいてきたるとへはしらすたゝよへこの

とのにはやとり侍しなりつくしの小式と申人のたちぬる月この殿はかひ給ひしなりいまあすそわたり給ふそれやをはし所もしり給らんをのれはたゝ人たち給なりこよひいけとありしかはまうてこしといへはかくすなめりないまはきてそやまんなどおとして(を)きてとなりの人々にとへはたしかなることいふもなければまいりてしかくくと申せはいとあさましくあへなしなともをろかなりいかにめものとのしつることにこそあらめ身つからの心には何事のつらさに(82ウ)「かはたちまちにゆきかくれんとも思はんいみしくともわか心とはさやうにはあらしと見えし心さまをたのみていまゝてかくてはをきたりつるそかしたゝありしほうしのとりにかくしつるならんかしいかはかりねたしと思ふらんとしらぬにはあらざりつれとかくもてさはかんもさすかにいかにそやおほえてかくしなしつるもあまりなるわか心のたゆくしさそかしあすはふちせにとありしもいかなるけしきを見てかいひたりけんと思ひつゝけられ給にいみしうくちをし何事もたくひなく有かたうめてたかりしにはあらたゝなつかし(83才)「うあはれと覚えつればたちまちにみしとまてはおもはさりつるにかく行ふなくなしつるよとおほすもむねふたかり給てつくゝとなかめくらし給まことしくやんことなきゝはにこそあらさらめさるかたなるしたくさのよすかの露ともなくさめぬへかりつる物をさまことに物をそろしけなりしものゝなれやらん有さまをいかはかり思ひなけらんとねたくゆゝしうもさまゝくに覚しやるに人わろうこひしうも思ひ出られ給てよるもまともまれたまはず

しきたへの枕そうきてなかれける君なきと(83ウ)「この秋のねさめは何事よりもかの夢のおほつかなさをいかにとたに聞あきらめてやみぬるはいといふせくおほつかさもよのつねなりいつれにてもはかくしき人にはあらしをまことにさることもあらはなれかほにもてなしてあらんこそううかたしけなれましてとし月へてかゝみのかけもかはらぬ

さまにていひしらぬものゝなかにおひいてたらんにいてやかゝればこそよからぬふるまひはすましきものなれすこし人数なるものゝかう跡かたなきやうやはある何かはあなかにおもひかすまふへき世にさることもあらしとしぬ（あ）てあ（84才）「さきかたに覚しなせとよろつよりも猶おほつかなきかたのことはむねふたかりてあつまのかたへなときゝしはもしさもあらはふせやにおひいてんさまなど御心にかゝりて我御すくせのほとくちをしくおほさる

そのはらと人もこそきけはゝ木ゝのなとかふせやにおひはしめけんつねに心ちよからぬ御ごとくきにならひたるなかにこの秋はむしの音しけきあさちかはらにことならすなきくらし給つゝもひるはをのつからまきれ給を心のつまとかやいひふるしたる夕ぐれのそらきりわたりてありかさためたる雲のたゝすまひ（84ウ）「うら山しくなかもやられ給にしの山もとはげにおもふことなき人たに物あはれなるへきにかりさへ雲るはるかに鳴わたりて涙の露もさかり過たるはきのうへにたまとをきわたしつゝ鳴よわりたるむしのこゑくさへつねよりもあはれけるにさへちかきすいかひのつらなるくれ竹おきの上かせなにときゝわかれぬむしこのゑく木からしに吹まよはなれたるは涙もとゝめかたく身にしみて心ほそくきこゆればすたれをすこしまきあげ給へるに木々のこすゑも色つきわたりてさとふきいれられたり（85才）

せくそてにもりてなみたやそめつらん木すゑ色ますあきの夕ぐれ
夕ぐれの露吹むすふ木からしや身にしむあきのこひのつまなる

なとさまく恋わたり給て涙をしのこひ給てつきのをかしけさはたゝかはかりをさいはひにてこのよの思ひいてにしつへしとて（そ）みえける雨さへすこしふりていとゝきりふかく見えわたさるゝ空のけしきはまこと物みしりたらん人にみせまほしけなりまたこれりやうふうのゆふへのでんの雨とくちすさひ給へるなとしつむ舟人なきこかるゝもことほり

なりかしかの舟に（85ウ）「は日かすのつもるまゝに心ちもまことにあるかなきかになり行をかくてしなはむなしきからをこれかれにみあつかはれんもねたくちをしきに猶いかてうみにおち入なんと思ひてさるへきひまを見るにさすかに人めのみしけて日ころに成行にこのたいふよろつにうらみつゝ衣のせきをうらみわふれとおなし事をのみなごやかにいへはさすかになされたつ人にていとよはけなるさまを心くるしく思ひつゝちかくもえよらさりけりかゝる程に大の舟にやんことなき人のなへての女にはにぬかましりたりけるを心かけてかたらひありきけりよひ過るまでみえぬをう（86才）「れしと思にかゝることをきゝてめのとはいとやすからすはらたゝしきにもきみのかくしつみふし給へればそかしれのやうにておはせましかはかゝることなからましと思ふにもいと心うくつらくさへおほえてをのか身をとさまかうさまにせためなし給よかゝる人の物いたくおもふはいみ侍なりいのちあらはわすれかたくおほさむ人にもあひみさせ給なんいとかく心おさなくいふかひなき心はいかなる人があるなといみしきことほりをいひきかすれとたゝこの大ゆふかみえぬおりくいてくるを我おもふことはかなふへきなめりと思ふよりほかのことなければいてあなあはれにまかせてもみてあ（86ウ）「あなかちに身をもてなしてうきめを見すればそかしいかなる有さまにてなからへんとすらんなとさすかにあはれにかなしくおほえ給へはいとゝねをのみなきていらへをたにし給はねはうちむつかりてたちぬるまにかしらもたけて見わたすに人々ねたるさまなればうれしとはよのつねならす思ひなからこよひやかきりならんと思にづかららん人たにおもひいたされぬへしまいてわれや忘るゝ人やとはぬと思ひしはおこなりけるわさかなと思ひつゝきたちぬれば涙の海に身はやかてうきいてゝうこかれすおきのかたのつまとをしあけてつくくゝとみ出せば空はいさゝかなるうき雲（87才）」もなくて月のかけさやかにすみわたりたるに山ははるかにうみ

のおもてきしかた行ききとも見えすはるくと行ゑもはてもしらすよせかへるなみはかりとみえて舟のはるかにこきゆくかいと心ほそきこゑにてむしあけのせとへこよひとうたふもいとあはれにきこゆ

なかれても逢瀬ありやと身をなけてむしあけのせとに待心みんとてもかほに袖をしあててとみにもうこかれぬほとに人やみつけんとして心なければわななくくひとへにはかまはかりをきてかみかきこしなとするにありし御あふきの枕にありければ手にさはりたるも心さは(87ウ)「きせられてまつとりて見れば涙にくもりてはかくしくもみえずすみのつやはかりそきらくとしてたゝいまかき給つるさまなりさしむかひ給へりしおもかけさへふと思出らるゝにこの世にては又みたてまつるましきそかしたゝいまかくなりぬともしり給はていつくにいかにしておはすらんねやしたまひぬらんさりともしねさめにはおほしいつらんかしたゝなとひとつことよりほかに又なき心まとひなり

よせかへるおきのしらなみたよりあらはあふせをそことつけもしなましすゝりをせかひにとりいてゝこの御あふきに物かゝんとするにめも(88才)「きりふたかりてとみにもかゝれす

はやきせのそのみくつと成にきとあふきのかせよ吹もつたへよともえかきはてす人のけはひのすれはとくおち入なんとてうみをのそくにいみしうおそろし(88ウ)「